昭和57年度

順天堂大学大学院体育学研究科

修士論文

子どもの健康生活に及ぼす母親の意識・態度
―身体活動との関連において―

健康管理学専攻

清水信純

論文指導教員

野原三洋子

昭和58年3月4日

論文審査委員

主査　渋谷　修

副査　小主武彦

副査　栗手閲夫

(順天堂大学用箋)

目　次

第 1 章　緒　言 …… 1

第 2 章　関連文献の考証 …… 4

第 3 章　本研究の目的 …… 18

第 4 章　研究方法 …… 19

第 1 節　調査対象およびその属性

第 2 節　調査内容

第 3 節　調査方法

第 4 節　調査期日

第 5 節　回収状況

第 6 節　分析方法

第 5 章　結　果 …… 25

第 1 節　母親と子どもの生活背景

(1)　居住地域

(2)　住居

(3)　家族

(4)　父親

第 2 節　母親の成育背景

(1)　学童期までの居住地域と同胞

(2)　各ライフ・ステージにおける健康状態

▽

（　　）

（3）　各ライフ・ステージにおける身体活動を好む・好まない
という意識

（4）　現在の身体活動

第3節　子どもの生活の現状

（1）　生活時間

（2）　遊びの現状

1）　遊び場

2）　遊び友達

3）　遊びの種類

第4節　子どもの身体活動を好む・好まないという意識と諸関連要因

（1）　身体活動を好む・好まないという意識

（2）　身体活動を好む・好まないという意識と身体活動の現状

1）　歩行

2）　戸外での遊びの頻度

3）　遊び時間

4）　遊び場

5）　遊び友達

（3）　身体活動を好む・好まないという意識と健康状態

（4）　その他の要因

第5節　乳幼時期における母親の育て方と現在の子どもの身体活動

( )

(1) 子どもの身体活動を好む・好まないという意識との関連

(2) 子どもの戸外での遊び時間との関連

第6節 「子どもを戸外で遊ばせる」育て方と子どもの身体活動の現状および健康状態

(1) 戸外での遊びの頻度が多いか否かとの関連

(2) 遊び友達および遊び場との関連

(3) 現在の子どもの健康状態との関連

第7節 子どもの身体活動を助長すると考えられる母親の育て方を促進する諸要因

(1) 住居形態との関連

(2) 母親の教育年数との関連

(3) 学校卒業から現在に至るまでの母親の健康状態との関連

(4) 各ライフ・ステージにおける母親の身体活動を好む・好まないという意識との関連

(5) 乳幼児期における育て方との関連

第6章 考察 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76

第1節 子どもの身体活動を好む・好まないという意識と身体活動の現状

第2節 子どもの身体活動を好む・好まないという意識と母親の就学までの育て方

第 3 節　子どもの身体活動を好む・好まないという意識と生活条件

第 4 節　「子どもを戸外で遊ばせる」育て方を促進した要因

第 7 章　結　論 …… 88

第 8 章　要　約 …… 91

謝　辞 …… 94

文　献 …… 95

欧 文 要 約 …… 101

資　料 …… 103

第1章　緒言

乳幼児期をいかに過すかは，生涯健康の視点から極めて大きな意義を持っている。この時期の日常生活は，「食べること」「身体を動かすこと」「休むこと」といった，相互に強い関連を持つ三本柱が中心となる。したがって，この三本柱が健全な成長発達の助長[52]と将来の健康生活への基礎づくりになるよう，設計され調和を保つことが望ましい[7]。そのために，個々の乳幼児の成長発達にそった生活のリズムをとらえ，各時期に適するように三本柱を中心とした，規則正しい生活を確立させていくことが重要となろう。しかし，この時期は生活を保育者，特に母親にゆだねている部分が多い。そこで，母親の育児に対する考え方や実行力が，この時期を有効に過させるために，大きな意味を持つことになる。

「食べること」を中心とした，母親の育児

に対する考え方や実行力についての研究は[32)47)48)]，著者が在籍する順天堂大学体育学部健康管理学研究室で，フィールド・ワークを通じ検討してきているが，本研究では「身体を動かすこと」すなわち，この時期の身体活動に焦点をあててみた。

乳幼児期の身体活動の必要性を指摘した論著は数多いが，Bailey[3)]はきわめて要領よく以下のようにまとめている。

1)身体活動は，子どもの正常な成長に必要である。2)若いときに身体活動をしないということは，身体機能の成熟に影響を及ぼし，その結果多くの成人の健康問題の原因となる。3)運動を好むという態度は，子どもの頃に決定される。もし成人に運動への参加を望むなら，小さい頃に運動することへの動機付けがなされているかどうかを気付かねばならない。4)教室内での勉強は，教室外での身体活動によって維持され，高められるであろう。すなわち，学習のみにはげんで，まったく身体を

動かさないならば，子どもをすっかりだめにしてしまう。

しかし，全国的に自然環境が侵され，社会環境も悪化し，現在では身体活動，その中でも特に運動遊び[53]の質量ともに減少傾向にある[12]といわれている。その反動として，「すぐ疲れたという」「朝からあくびをしている」「少しのことで骨折する」といった子どもが増加し[17]，さらに，体格は良くなったが運動能力はそれほど高くなっていない子ども[30]や，運動不足による肥満の子ども[29]をも作り出してしまった。このような状況下で子どもの身体活動を活発にすることによって，生涯を通じての健康生活を確立するためには，母親の生活・成育経験を背景とした身体活動を意図した育て方についての意識・態度が，どのようなかかわりを持つのかという知見を得ることが，きわめて重要であると考えられる。

第2章　関連文献の考証

まず，身体活動と生活習慣との関連について，最近の文献を以下に概観する。

高城[42]らは運動遊びを中心とした生活習慣の確立が，食事および睡眠にどのような効果を与えるかについて保育園児を対象に実証的に研究した。ここでは対象の保育園児を二群，すなわち1ヶ月間毎日継続的に運動遊びを負荷する運動群と，これを負荷しない対照群とに分け，両群について食事摂取状況および午睡状況について比較検討した。その結果，運動群の方に好ましい食事摂取行動（おいしそうに全部食べる）を示した子が多い傾向がみられ，また，午睡についても運動群の方に寝つきの良い子が多い傾向がみられたと報告している。

高城[41]らは大都市・中都市・農村に居住する幼児それぞれ150名計450名を対象に，子ど

もの遊びと健康状態との関連について報告している。この中で，都市の子どもの健康児の方が，健康不良児より活動的な遊びを好むものが多く，積極的な運動遊びが健康状態に大きく関与していると結論づけている。

廣嶋[8]は，幼児の健康度と戸外遊び時間との関係をみるため，母親にアンケート調査を実施し、検討した。その結果，幼児の健康度は戸外遊び時間に影響されているという知見を報告している。

高野ら[44]は，幼稚園の教諭と保育園の保母を対象にアンケート調査を実施し，幼児の体質罹患傾向と諸条件について検討しているが，その中で，戸外遊びの少ない幼児に有所見が多く，特に咳嗽，喘鳴，発熱，嘔吐，腹痛，下肢痛，乗物酔いが目立ち，その他の所見と合わせて幼児期の体力増進には，戸外遊びを欠くことが出来ないと報告している。

これらの一連の研究からみても乳幼児が身体活動を活発に行なうことは，健康を向上さ

せるのに効果的といえよう。

次に発育と関連した研究例を考証する。

大山[35]は，幼児の体格測定とその母親へのアンケート調査の実施により，幼児の身体発育に関連する主要因について検討した。その結果から，運動への志向性を含む9要因をとり出し，これらの要因と身体発育への関連が見い出されたとしている。

宮田ら[27]は，小学校児童（9才児）の健康調査を実施し，歩行開始期とその遅速の決定要因および発育健康状態について検討した。その結果から，満9才時の発育健康状態で歩行開始期の遅速による影響を受けると考えられるものは，体重，現症，不良生活習慣，運動の好き嫌いなどであったと報告した。

身体活動と大きなかかわり合いを持つ運動能力と子ども自身の要因との関係を問題にした研究としては次のようなものがある。

松永[22]は，502名の幼児に運動能力テストと性格診断検査を実施し，運動能力と性格との関係について検討した。その結果，運動能力の劣っている幼児は，依存心が強く，社会性が欠如している傾向がみられると報告している。

さらに，戸村[45]は，637名の児童に運動能力テストと心理検査を実施し，その結果より，運動能力の優れている児童は，劣っている児童よりも情緒面で安定しており，動作も活発で，指導性があるという傾向が認められ，さらに，自己と社会に対する適応性が良かったと報告している。

大山[36]は，児童に運動能力テストとアンケート調査を実施し，生活・家庭環境との関係を追求する目的で検討を加え，動的遊びをしている児童は，静的遊びをしている児童より運動能力が発達する傾向を示したとしている。また体力は，運動への意識との関連が強く，運動の好きな児童は，そうでない児童より体

力が優れていたと報告している。

仲田[31]らは，187名（男子107，女子80）の中学生に対し運動能力テストと，アンケート調査を実施し，運動ぎらいの子どもの特徴をとらえるべく検討を加えた。その中で，男子では，運動が好きな群が，嫌いな群に比べて運動能力が優れていると報告している。

以上よりみても，乳幼児期に身体活動を積極的に行なうことが，子どもの健康状態，生活習慣の確立，発育，性格形成などに好ましい影響を与えることが示唆される。

次に，身体活動と密接な関係のある，この運動能力に影響を及ぼす要因についての研究をみた。

長谷川[57]らは，60名の児童に対する運動能力テストを，また，児童およびその父母にアンケート調査を実施し，運動能力の発達と環境との関係について検討した。その結果，児童の日常生活における運動経験の多少や家庭に

おける遊び場の広狭が、運動能力に影響を及ぼしていることが認められたと報告した。

松田[18]は、幼児については運動能力テストを、また、その母親に対してはアンケート調査を実施し、幼児の遊びと運動能力との関連について検討した。その結果、戸外での遊び時間が多く、運動的な遊びを好み、5人以上の遊び仲間を持っている、といった条件をそなえている子どもは運動能力が優れていると報告した。

倉島[15]は、1045名の幼児に対し運動能力テストを、その母親には生活環境調査を実施して、幼児の体力と生活環境との関連について検討した。その結果、運動能力は遊び友達、遊び場の広さ、病歴と関連があると報告した。

高田[40]らは、幼児期における運動能力のうちの調整力と生活条件との関連について、保護者へのアンケート調査を実施し、相関分析を行なった。その結果、歩行開始年令、住居の種類、居住階数、友だちの数、父母との遊び

スポーツ教室への参加，戸外での遊びが，低い相関ながら調整力と関連性をもっていると認められた。また，これらの生活条件が相互に関係し合いながら調整力と関連するのではないかと報告している。

松浦[24]らは，幼児の調整力と生活条件との関係をみるため，幼児の調整力については，調整力フィールドテストと親の判断による評価によって推定し，さらに親に生活条件のアンケート調査を実施し，検討した。その結果，調整力と個々の生活条件について関連性は認められたものの，調整力の差異を示すほど強い関連ではないとの推論を得た。

栗本[16]らは，幼児を調整力フィールドテストによって「上位群」と「下位群」に分け，それぞれの生活諸条件について比較検討した。その結果，調整能力と個々の生活条件とに関連は見出されなかったと報告した。

浅見[1]らは，調整力と体質との関連をみるために，300名の幼児に対しては調整力テスト

を，その父母に対しては体質傾向のアンケート調査を実施して検討した。その結果，調整力と体質はほとんど相関がないと報告した。

森下[28]は，幼児の運動能力発達と内的外的要因との関係をみるため，450名の幼児に運動能力テストを，その母親にアンケート調査を実施して，検討した。その結果，体育指導，体格，活動的な運動志向といったものが，運動能力にいくらかの影響を与えるのではないかと報告した。

松浦[25]は，運動能力と生活条件について，幼児には調整能力テストを，その母親にはアンケート調査を実施して，相関分析により検討した。その結果，暦年齢，両親の有無，歩行開始月齢，食事量，休日における家族とのレクリエーション，屋内での遊び時間などを含む23の生活条件変量によって運動成就能力の60%以上が説明できることを示唆した。

松浦[26]は，生活活動と調整力との関連について，幼児への調整力テストと，その母親への

アンケート調査とを実施して検討した。その結果，顕著ではないが，活発な身体活動が幼児の運動成就の主要関与能力と考えられる調整力の優劣に相関を示す条件であるとの知見を得た。

このように，運動能力の発達に影響を及ぼすとみられる要因としての生活条件は，直接的に影響を及ぼすよりも，他の条件と相互関連を持ち間接的に影響を及ぼすと見るのが，妥当ではないかと考えられる。

また，母親の育て方と子どもの運動能力との関連の研究もいくつか報告されている。

松島[20]らは，乳幼児の運動機能に及ぼす諸因子を分析するため，2～6才までの幼児288名に運動能力テストを，またその母親に面接調査をそれぞれ実施した。その結果，子どもの運動機能は，子どもの活発さ，友達の有無，1人歩きの早遅，および父母の運動機能に関連がみられ，住居の部屋数，住居階数，養育

能度には関連がみられなかったと報告している。

また，津守[46]らは，乳幼児120名とその母親を対象とし，乳幼児の精神発達および養育態度に関する面接調査を実施して，乳幼児期の母親の養育態度が、乳幼児の精神発達にどのような関連をもつかについて検討を加えた。その結果，養育態度は，乳幼児の社会的行動、食事行動，探索行動には影響を及ぼすが、運動能力には、なんら影響がなかったと報告した。

松田[19]らは，幼児の運動能力が居住地区，遊び，および母親の養育態度との関連をみるため，799名の幼児に運動能力テストを，その母親にアンケート調査と田研両親態度検査を実施し，検討を加えた。その結果，居住地区では，団地に住む男子は団地外で居住するものより筋力がおちる傾向を示した。また，運動遊びを好む者，遊び仲間の人数の多い者ほど，運動能力が優れていた。しかし，母親の

養育態度と運動能力とには関係がみられなかったと報告した。[9]

本間は，運動能力に影響を及ぼす要因をみるため，4～5才児に運動能力テストを，そしてその母親にはアンケート調査を行ない検討した。その結果，4～5才児の運動能力と歩行期までの母親の養育態度（具体的には，赤ちゃん体操，マッサージ，つかまり立ち期の歩行訓練，散歩，日光浴）との間には明らかな関係はみられなかったと報告した。

このように，子どもの運動能力と母親の育児態度との間には，はっきりした関連を示さないと結論づけた研究に対して，関連がみられるとした報告がある。

松永[23]は，幼児に運動能力テストを，その母親にアンケート調査を実施し，幼児の運動能力とその背景となる因子を見出すため，検討を加えた。その結果，運動能力には，歩行開始時期，屋外での遊び，母親との遊び時間，子どもの性格が影響を及ぼすと報告している。

このように，運動能力発達に関しては，母親の育て方が他の生活条件と同様に，互いに直接的でなく，間接的に影響を及ぼしているとみられる。

これまで、身体活動と大きなかかわり合いを持つ運動能力について概観してきた。次に実際に身体活動を実施することと深いつながりを持つ[3]、身体活動を好む・好まないという意識，言いかえれば「運動嫌い」についての研究を考証した。

石橋[11]らは，運動嫌いを規定する年齢別要因について，小・中・高校生1910名を対象にアンケート調査を実施し，因子分析を用いて検討した。その中で，小学生の運動嫌いの主な要因は，劣等不安感情の因子，身体不自由の因子，幼児期遊戯不足の因子，幼児期の運動環境不足の因子，幼児期運動経験不足の因子などであると報告した。

佐久本[38]らは，石橋らの研究に引き続き運動

嫌いの年齢別の要因分析について，小学生，中学生，高校生，大学生計687名に対し，アンケート調査を実施し，検討した。その結果，身体・生理的要因，教科内容的要因，態度・性格的要因，家庭環境的要因（幼児期の），技能・適性的要因などが運動嫌いの要因として認められると報告した。

波多野ら[6]は，運動嫌いの生成機序に関して，613名の大学生にアンケート調査を実施し，その中で，自己を運動嫌いと評価した者24名に対し個別面接調査を実施した。その結果，運動嫌いの発生メカニズムの中で「運動能力の低位に対する劣等感」が大きな要因として存在しており，さらに幼児期の運動経験の不足，病弱，虚弱，周囲の人びとの運動への関心が低いということが背景として存在していると報告した。

このように，運動嫌いの原因の中に，幼児期の運動経験の不足が認められており，幼児

期の生活が、母親の庇護のもとに展開されることを考えれば、この時期の身体活動体験にとって、母親の育て方は大きな影響力を持っているのではなかろうかと考えるわけである。

第3章　本研究の目的

幼児期の身体活動体験には生活環境が大きな影響を及ぼす。幼児期の成長発達時点に見あった生活環境づくりは，母親の役割の中で最も大切なことの一つである。そこで，母親が身体活動を助長するように意図して幼児期の育児を行なったならば，子どもの将来の身体活動に良い影響を与えるのではなかろうか。

本研究は，幼児期が終わり，全面的な母親依存から離れたばかりであり，まだ学校教育の影響もさほど受けていない，小学校1年生の時点での身体活動の現状をとらえ，それまでの母親の育児態度と子どもの身体活動に対する意識について，調査を実施して分析・検討を試み，幼児期の身体活動体験を活発にするための参考資料を得ることを目的とした。

第4章　研究方法

質問紙を作成し、留置法により調査を実施した。すなわち、対象者の子どもの各担任から調査票を子どもを通じて家に持ち帰らせ、母親が記入した後、日時を定めて、子どもより担任のところへ提出し、集めてもらうという方法をとった

第1節　調査対象およびその属性

調査対象は、東京都江東区（A小学校）、武蔵野市（B小学校）、千葉県船橋市（C小学校）からそれぞれ小学校1校、計3校の1年生の母親、361名である。

調査対象者の居住地域の概略は、次のとおりである。

東京都江東区（A小学校）

江東区は、東京都23区の東部に位置し、人口約36万2千人（昭和55年現在）、面積35.04

Km²のいわゆる江東デルタ地帯にあり，隅田川と荒川に囲まれている。木材業，金属・機械生産業を中心として，商業地，工業地，住宅地の混合した地域である。A小学校は，この区の西部の住宅・商工業地にある。

東京都武蔵野市（B小学校）

都の中央部，武蔵野台地の一部にあり，練馬，杉並両区の西に隣接する人口約13万4千人，面積11.03Km²（昭和54年現在）の住宅都市である。B小学校は，市中央部のほぼ典型的な住宅地にある。

千葉県船橋市（C小学校）

千葉県の西北部に位置し，市域は東京湾に面する臨海地域より両総台地にかけて広がる人口約47万4千人，面積84.95Km²（昭和54年現在）の住宅，商工業都市である。C小学校は市北東部の団地に隣接する住宅地にある。

次に，対象者（母親）の属性は，次のとおりである。母親の年齢は最高47才，最低27才で平均±1SDは33.85±3.74才であった。教育

年数は平均±1SDが12.63±1.66年、大学卒業以上の者は9.7％（31人）であった。現在、多くは主婦専業で全体の80.3％（244人）を占め、職業を有している者は19.7％（60人）であった。

第2節　調査内容

研究目的の主旨にそって調査票はフェースシートの他に次のような設問を設定した。なお，子どもの生活時間については先行研究[12]を参考にした。

A：母親（対象者）の成育環境，これまでの身体活動，これまでの健康状態に関するもの（12項目）

B：子どもの就学前までの身体活動に対する母親の意識・態度に関するもの（6項目）

C：子どもの身体活動，健康状態，日常生活の現状に関するもの（12項目）

この中で，現在，子どもが身体活動を好む好まないという意識については，母親以外に

学校における観察者として，担任にも回答を求めた。これは，子どもの生活の場は，家庭の近隣地域と，学校が主となるが，その両者の場の違いによって，身体活動を好む・好まないといった意識が，異なるのではないかと考えたからである。

使用した調査票の様式を資料1に示す

第3節　調査方法

対象者である母親に対して，調査についての主旨および，記入方法を説明した協力依頼状と，調査票を一括して封筒に入れ，小学校の担任から，子どもを通して家庭に配布した。母親の記入後，指定した期日に子どもを通じて，担任へ提出させ回収した。

担任に対しては，「子どもの身体活動を好む・好まないという意識」についての調査票を配布し，同時期に記入してもらって回収した。

第4節　調査期日

調査期間は次のとおりであり，調査票は家庭に2～3日間留置いた。

- A小学校　198年7月5日～7日
- B小学校　1982年7月6日～9日
- C小学校　1982年7月8日～10日

第5節　回収状況

回収状況は，表-1のとおりである。母親以外（例えば父親）のものが記入した調査票を除いた317票（全体の87.8％）を採用した。そのうち，「子どもの身体活動を好む・好まないという意識」について，母親・担任両者の回答を得られたものは，255票（全体の70.6％）であった。これを「子どもの身体活動を好む・好まないという意識」に関する分析に用いた。他の分析には，317票を用いた。

表－1　回収状況

小学校	対象数(%)	回収数(%)	採用数(%)	子どもの身体活動を好む・好まないという意識のデーター数(%)
A	154 (100)	141 (91.6)	134 (87.0)	98 (63.6)
B	102 (100)	90 (88.2)	83 (81.4)	57 (55.9)
C	105 (100)	105 (100)	100 (95.2)	100 (95.2)
全　体	361 (100)	335 (92.8)	317 (87.8)	255 (70.6)

(順天堂大学用箋)

また，対象者の子どもの男女比率は，男子55.2%（175人），女子43.2%（137人），不明1.6%（5人）となっていた。

第6節　分析方法

結果の集計はパスキーⅢAを用いて，クロス集計を中心に分析した。

「子どもの身体活動を好む・好まないという意識」については，母親・担任それぞれの回答に同じウェートを与え，両者を合わせたもので尺度を作り文析した。

統計的検定は，χ^2検定を中心とし，一部については，二つの比率の差の検定[54]，t検定を用いた。

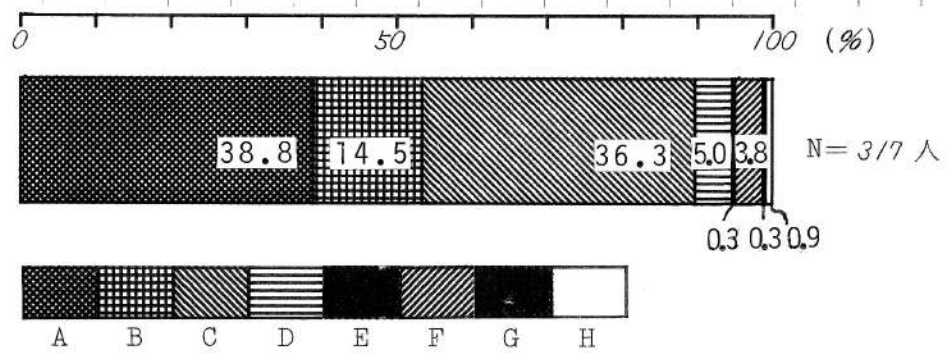
第5章　結果

第1節　母親と子どもの生活背景

対象である母親とその子どもの生活環境要因について概観してみた。

（1）　居住地域

居住地域は図-1に示したとおり，住宅地が38.8％（123人）と最も多く，次いで住宅・商業・工業混合地域が36.3％（115人）であった。



A 住宅地
B 団地
C 住宅地であるが商店や町工場もある
D 商店街
E 町工場がほとんどである
F 住宅地であるが田畑もある
G 田畑がほとんどである
H その他

図－1　居住地域

(2) 住居

住居は，集合住宅（アパート，マンション社宅など）は62.8％（200人）と最も多く，次いで一戸建住宅に住んでいるものが36.6％（115人）であった。住んでいる階数は，最も高いところでは14階（2人）であり，また平均±1SDは3.86±2.80階であった。平均居住年数は6.73±5.65年であり，平均±1SDの部屋数（居間，ダイニングルームなどを合計した数）は4.05±1.47部屋であったが一戸建住宅は5.10±1.64部屋，集合住宅は3.64±0.73部屋となっていた。

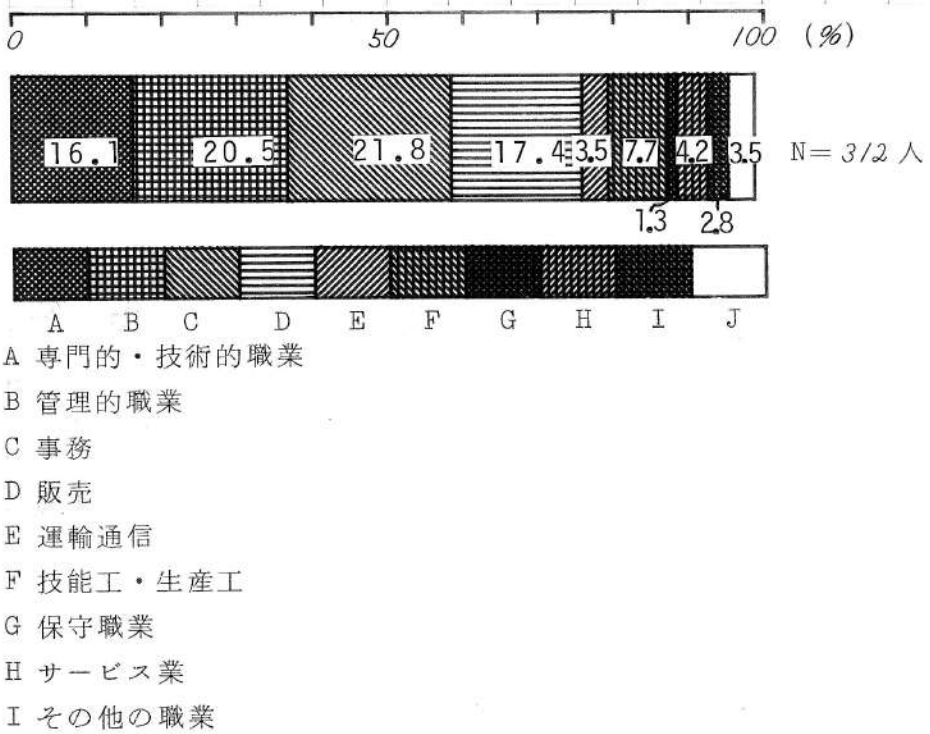
(3) 家族

平均家族員数は4.33±0.94人で，二世代（核）家族の占める割合は87.8％（274家族）であった。母子家庭は全体の1.9％（6家族）であった。

(4) 父親

父親の年齢は，25才～56才の間に分布し，平均±1SDは36.73±4.66才であった。教育年

数は平均±1SDで13.77±2.39年となり，そのうち大学卒業以上は45.8%（143人）を占めていた。職業については図-2に示したとおりであった。



図－2　父親の職業

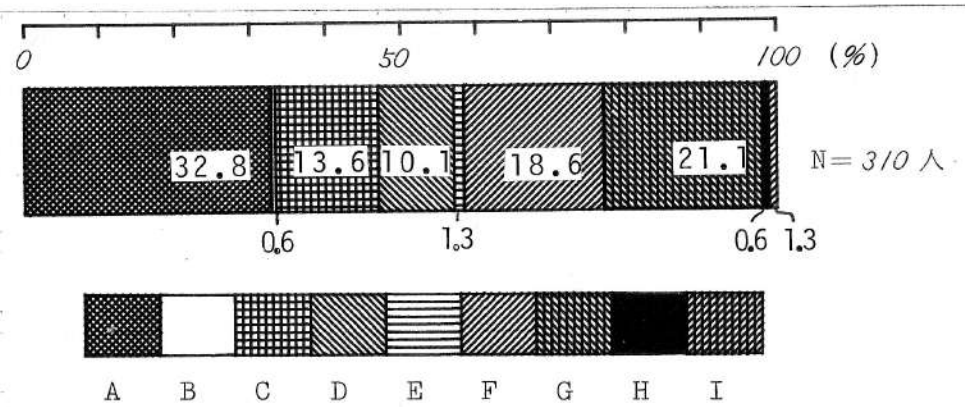
第2節　母親の成育背景

（1）　学童期までの居住地域と同胞

母親の同胞数は9人（7人）を最高に平均±1SDは3.80±1.70人であり，出生順位は1

番目が最も多く29.3%(93人)，平均±1SDでは2.68±1.74であった。

次に母親の学童期までの居住地域は，図-3のごとくで，多いものは住宅地32.8%(104人)，田畑のある地域[註1)]39.7%(126人)であった。



A 住宅地
B 団地
C 住宅地であるが商店や町工場もある
D 商店街
E 町工場がほとんどである
F 住宅地であるが田畑もある
G 田畑がほとんどである
H その他
I N.A.

図－3 母親の学童期までの居住地域

註1)：住宅地であるが田畑もある地域と田畑がほとんどである地域を合わせたもの

(2) 各ライフ・ステージにおける健康状態

母親の健康状態を各ライフ・ステージ毎にみたものを図-4に示した。「とても丈夫」または「丈夫」と回答したものは、各ステージで60%前後を占めていたが、このうち特に生徒学生期は68.5%(217人)で最も高く、そ

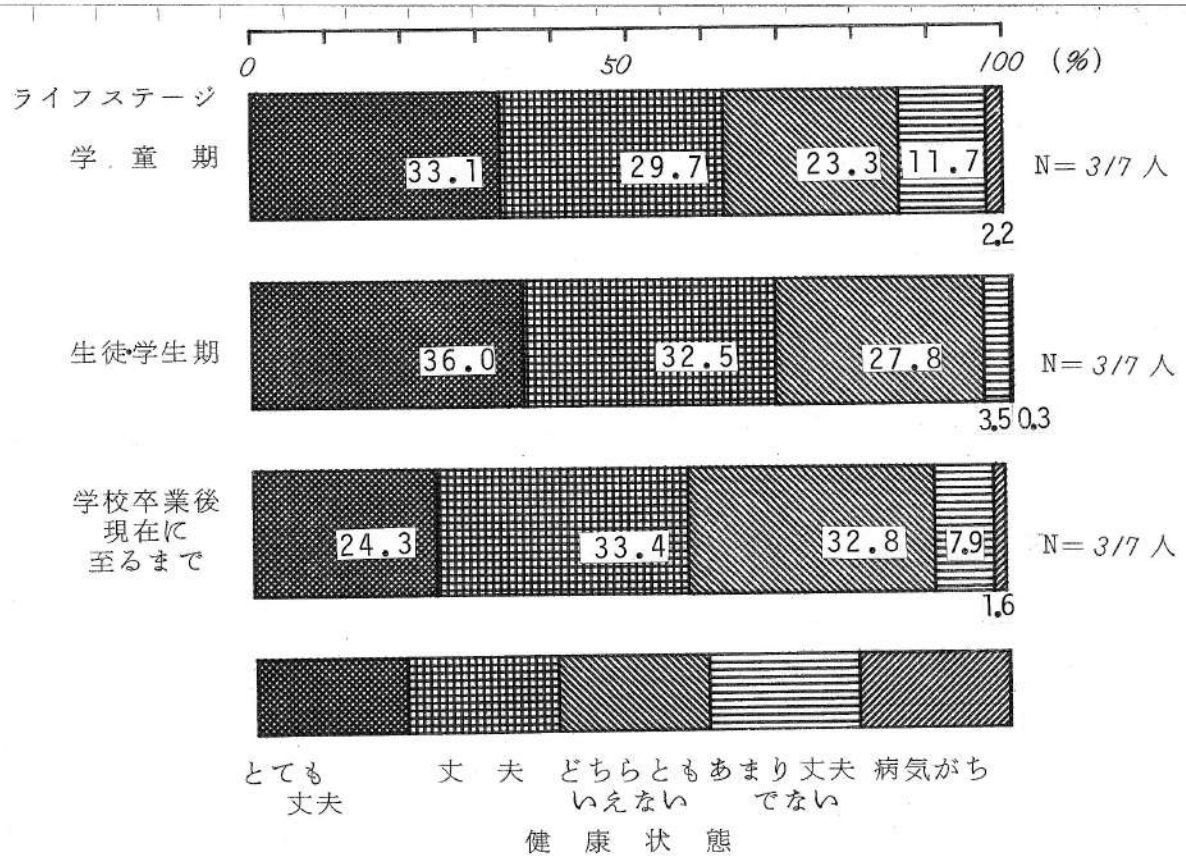
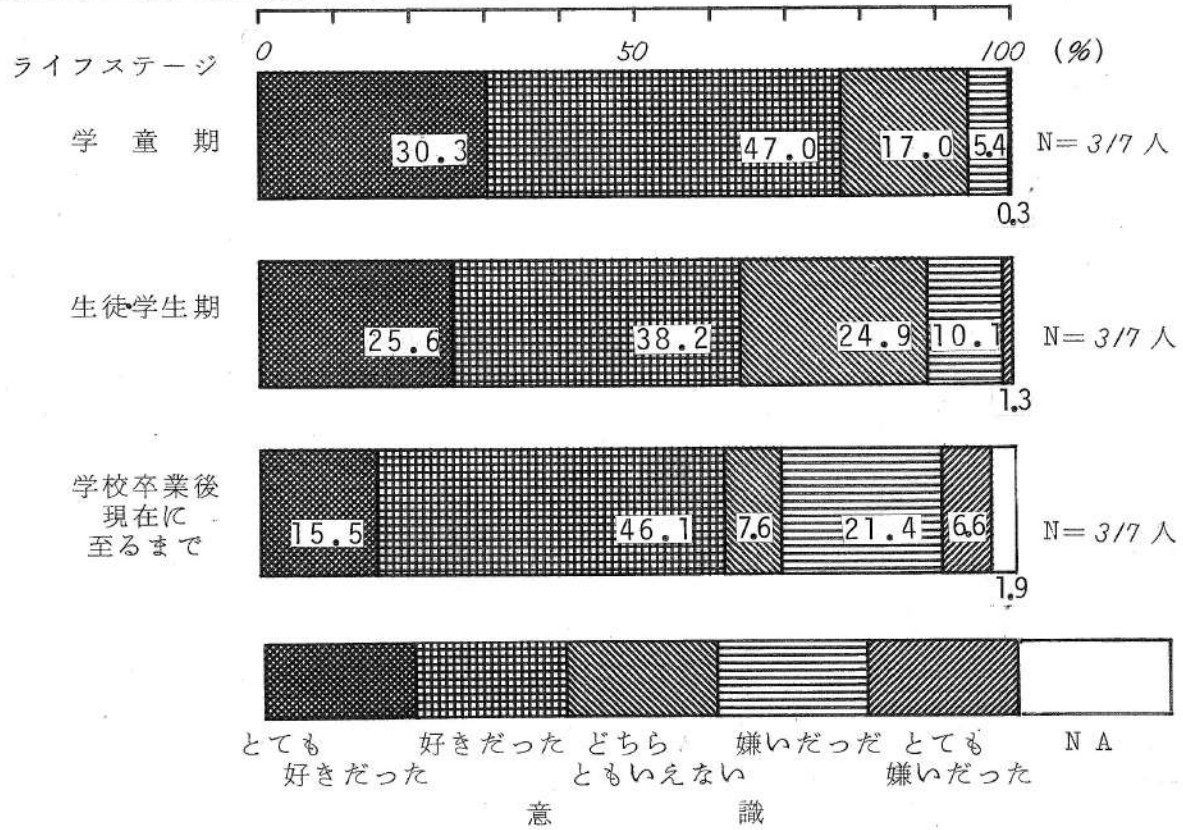


図-4 母親の健康状態(ライフステージ別)

れ以降学校卒業後，現在に至るまでの期間では生徒・学生期に比べて減少していた。この両時期における出現率では，両群の間に有意な差（$P<0.01$）が認められた。

（3）各ライフ・ステージにおける身体活動を好む・好まないという意識

母親の身体活動に対する姿勢を各ライフ・ステージ毎にみたものが図-5である。「とても好きだった」または「好きだった」という積極派は，ステージが進むにつれて減少傾向を示し，特に学童期と生徒・学生期との間には出現頻度に有意な差（$P<0.01$）が認められた。また、「とても嫌いだった」または「嫌いだった」といった消極派はステージが進むと共に増加傾向を示しており，特に生徒・学生期と学校卒業後，現在に至るまでの期間との間の出現頻度には，有意な差（$P<0.01$）が認められた。



図－5　母親の身体活動を好む・好まないという意識（ライフステージ別）

（4）　現在の身体活動

現在，母親自身が身体活動をどのように実施しているかという点について「定期的なスポーツ・運動」の実施と「家庭生活で意識的にからだを動かす」という実施の上で2つのタイプに分けてみた。「定期的なスポーツ・運動を実施している母親は，全体の31.5%（

100人)であり，そのうちの90%(90人)が1週間に1時間以上実施しており，残りは，1週間に60分未満であった。一方，日常の「家庭生活でからだを動かす」ということを心掛けて実施している母親は，90.3%(286人)であった。

第3節　子どもの生活の現状

子どもの日常生活は，次のような状況であった。

(1)　生活時間

平日の生活時間についてみると，起床時刻は早い子で午前6時以前，遅い子で午前8時であり，午前7時までに全体の88.9%が起床していた。なお平均±1SDは午前6時45分±24分であった。

次に就寝時刻は早い子で午後7時，遅い子で午後10時であり，全体の92.5%は午後9時までに床に入る生活をしていた。

その他の生活時間の平均±1SDを見ると，

戸外での遊び時間2.15±1.09時間，自宅室内での遊び時間0.71±0.75時間，テレビ視聴時間1.02±0.71時間，自宅での学習時間0.32±0.40時間となっていた。

けいこ・習いごとへは72.9%（231人）の子どもが参加しており，その子どもたちの月平均±1SDの参加回数は8.23±4.39回であった。

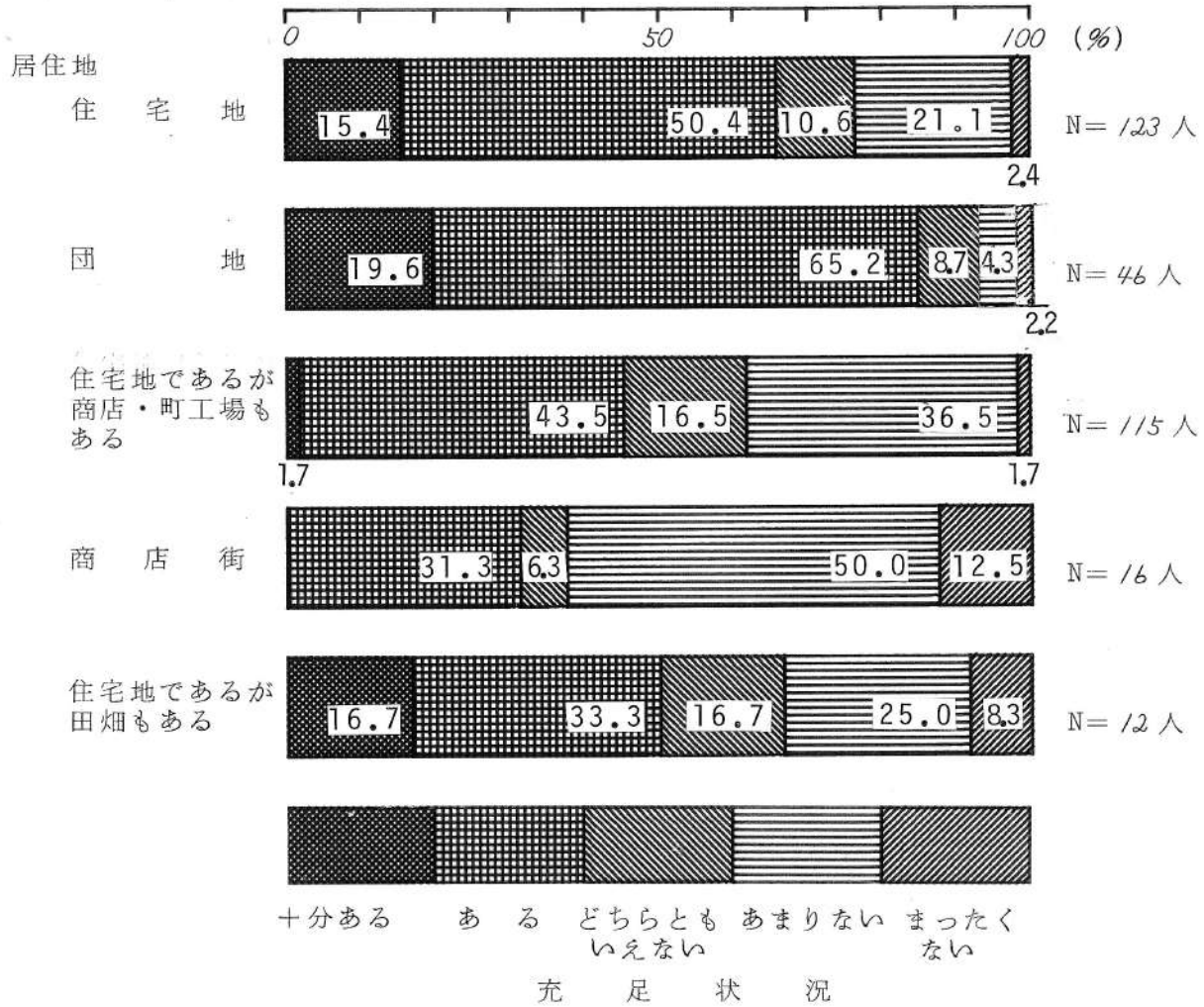
（2） 遊びの現状

1）遊び場

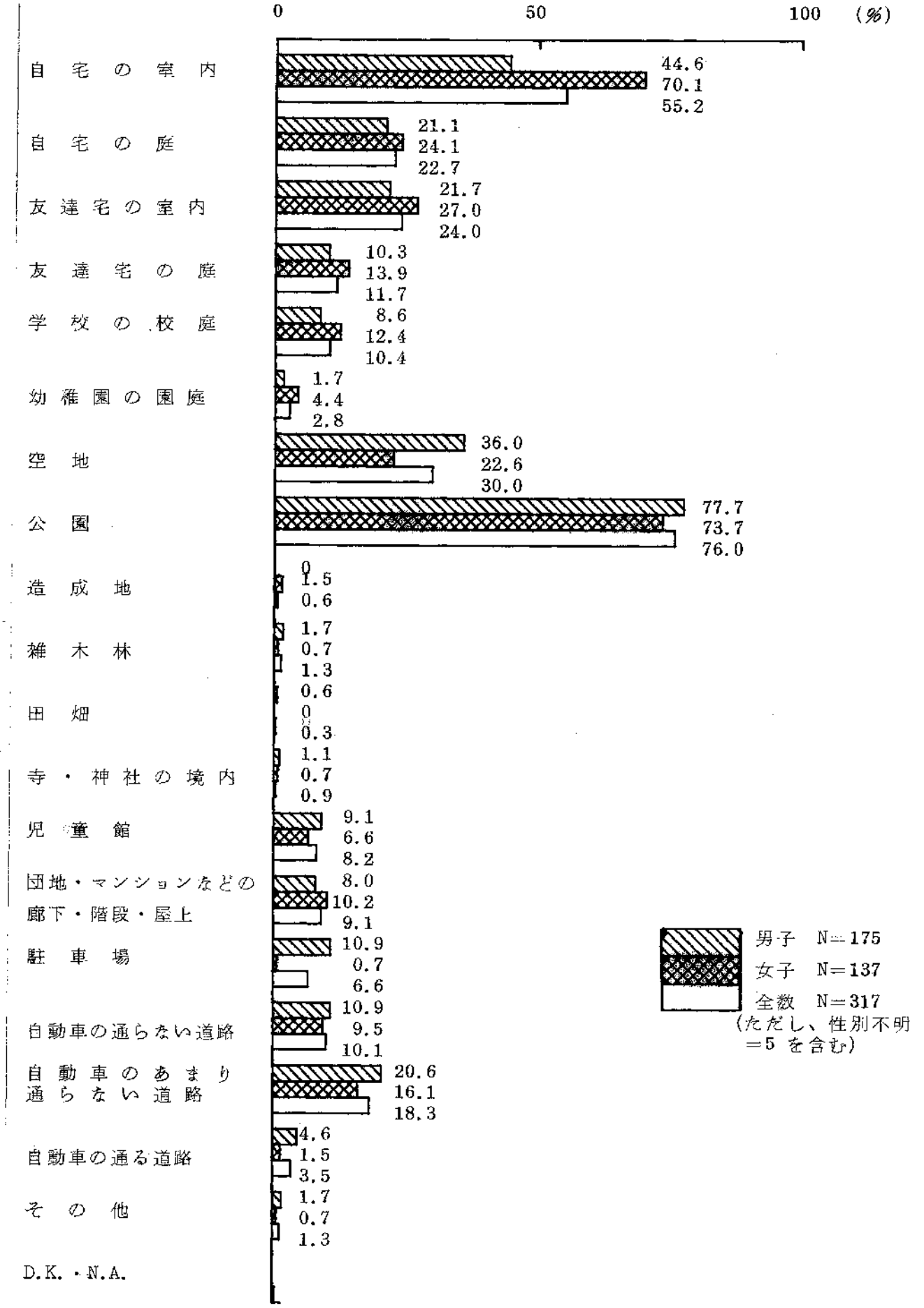
子どもの遊び場の充足状況について居住地域別に示したものが図-6である。これによれば，住宅地及び団地の居住者の方が当然ながら住宅・商業・工業混合地や商業地居住者に比べて，子どもの遊び場が「十分ある」または「ある」とする者の割合が有意（$P<0.05$）に高かった。

次に子どもが，実際に使う遊び場のうち，よく遊ぶ場所3ヶ所を挙げてもらった。その結果は図-7に示したとおりである。多い順に

挙げると，男子では公園，自宅の室内，空地女子では公園，自宅の室内，友人宅の室内となっていた。



図－6　遊び場充足状況

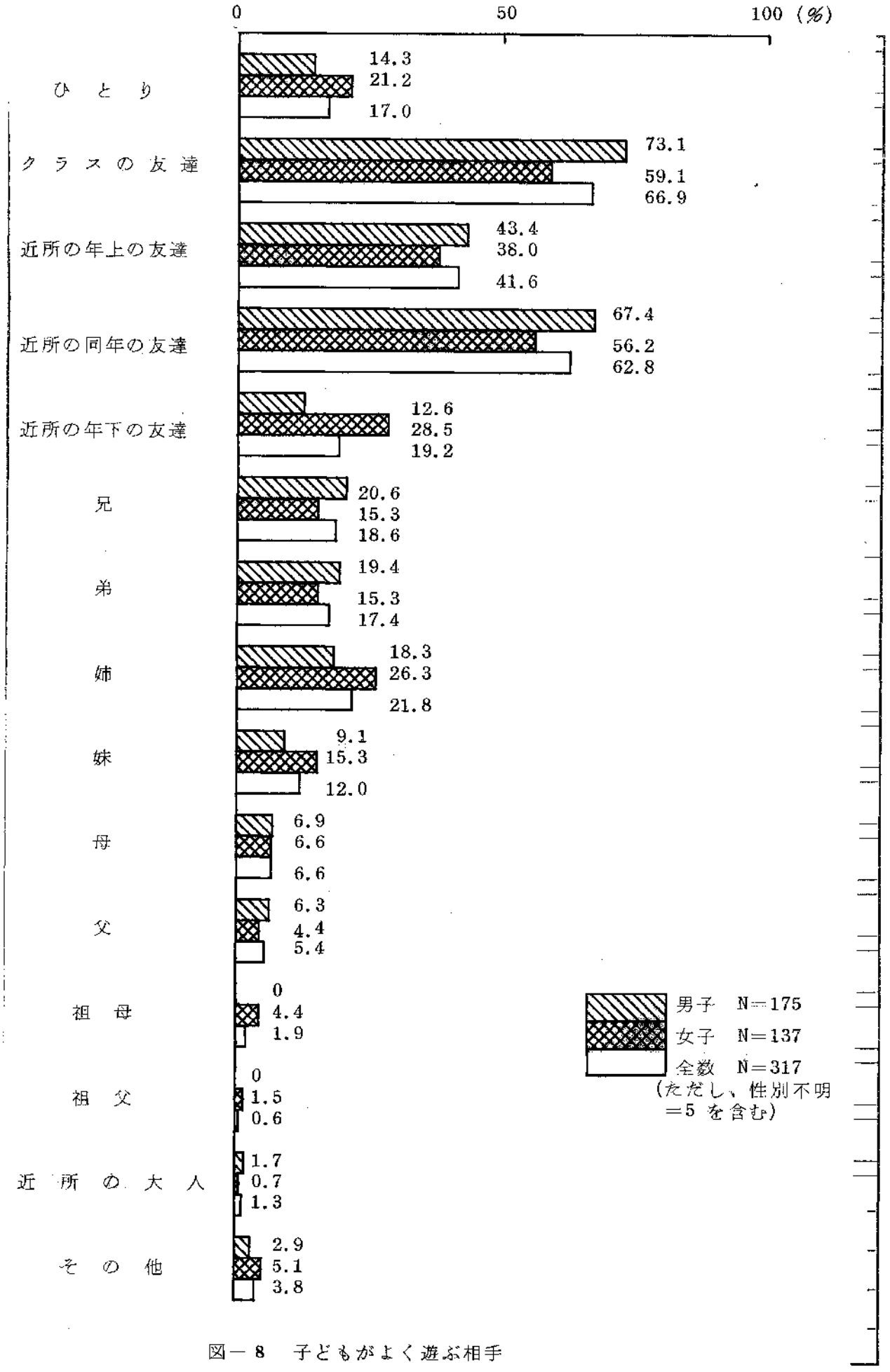


図－7　子どもがよく遊ぶ場所

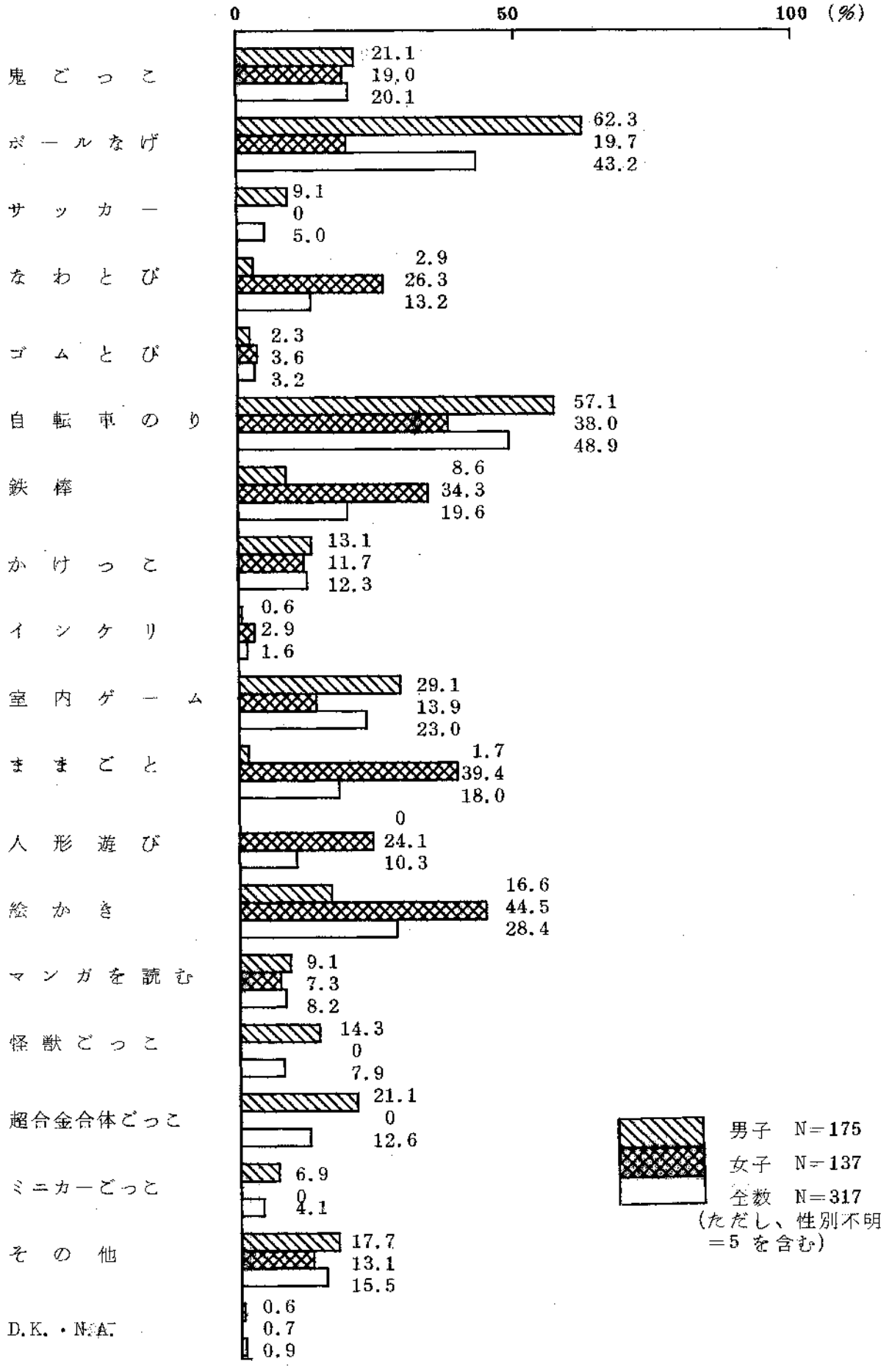
2）遊び友達

子どもの遊びと友達の数との関係をみるため，母親の評価にもとづいて，ひとり遊びをよくする子ども（53人）とひとり遊びをあまりしない子ども（262人）の2群にわけ，比較してみた。友達が「とても多い」または「多い」とする者は，ひとり遊びをよくする群では54.7％（29人）であったのに対し，ひとり遊びをあまりしない群では80.2％（210人）であり，両群の間には有意差（$P<0.001$）が認められた。

次に実際の遊び相手を知るために，よく遊ぶ相手3人を母親に挙げてもらった。その結果は図-8に示したとおりで，男女とも回答率の高い順にクラスの友人，近所の同年の友達近所の年上の友達となっていた。



図－8　子どもがよく遊ぶ相手



図－9　子どもがよくする遊びの種類

3）遊びの種類

子どもが，日常どのような遊びをしているかを見るため，よくする遊びを3種類母親に挙げてもらった。その結果図-9に示したとおり，頻度の高いものは，男子ではボールなげ自転車のり，室内ゲーム，女子では絵かき，ままごと，鉄棒，であった。

第4節　子どもの身体活動を好む・好まないという意識と諸関連要因

（1）身体活動を好む・好まないという意識

現在，子どもが身体活動に対してどの程度積極的に取り組んでいるのか，その状況を知るべく母親からみた自分の子どもに対する評価と，担任からみた評価をそれぞれの見地から「とても好む」「好む」「どちらともいえない」「好まない」「まったく好まない」の5段階尺度で判定してもらい，その結果を図-10に示した。「好む」または「とても好む」

と判定したものは，母親では77.6%（198人）であったのに対し，担任の評価では49.8%（127人）となっていた。母親による「とても好む」という評価が担任では少なくなり，その分，担任では「どちらともいえない」の評価が増えており，全体的には母親の評価では一段階づつ「好む」方向へ強調されていた。

そこで，1人の子どもの身体活動に対する意識を総合的に判定するために上記の5段階尺度を用い，「とても好む」を5点，「好む」を4点，「どちらともいえない」を3点，「好まない」2点，「まったく好まない」1点とし，その上で母親の評価と担任の評価の合計点を評点としてみた。この評点には母親の評価と担任の評価の両方を備えていなければならず，結局317人のうち255人が採用された。その結果を図-11に示した。

この評点の平均±1SDは7.56±1.45点であった。この結果，+1SD（9.01点）にあたる9点以上のものを「身体活動を好む群」とし，

−1SD（6.11点）にあたる6点以下のものを「身体活動を好まない群」として扱うことにした。この両群の平均点は「好む群」では9.32±0.46点，「好まない群」では5.52±0.68点であり，両群の間には有意な差（P<0.001）が認められた。この結果により，「身体活動に対する意識」についてはこの評点法にもとづいて，「好む群」（73人）と「好まない群」（56人）との両群に分けて比較検討を行なうこととした。

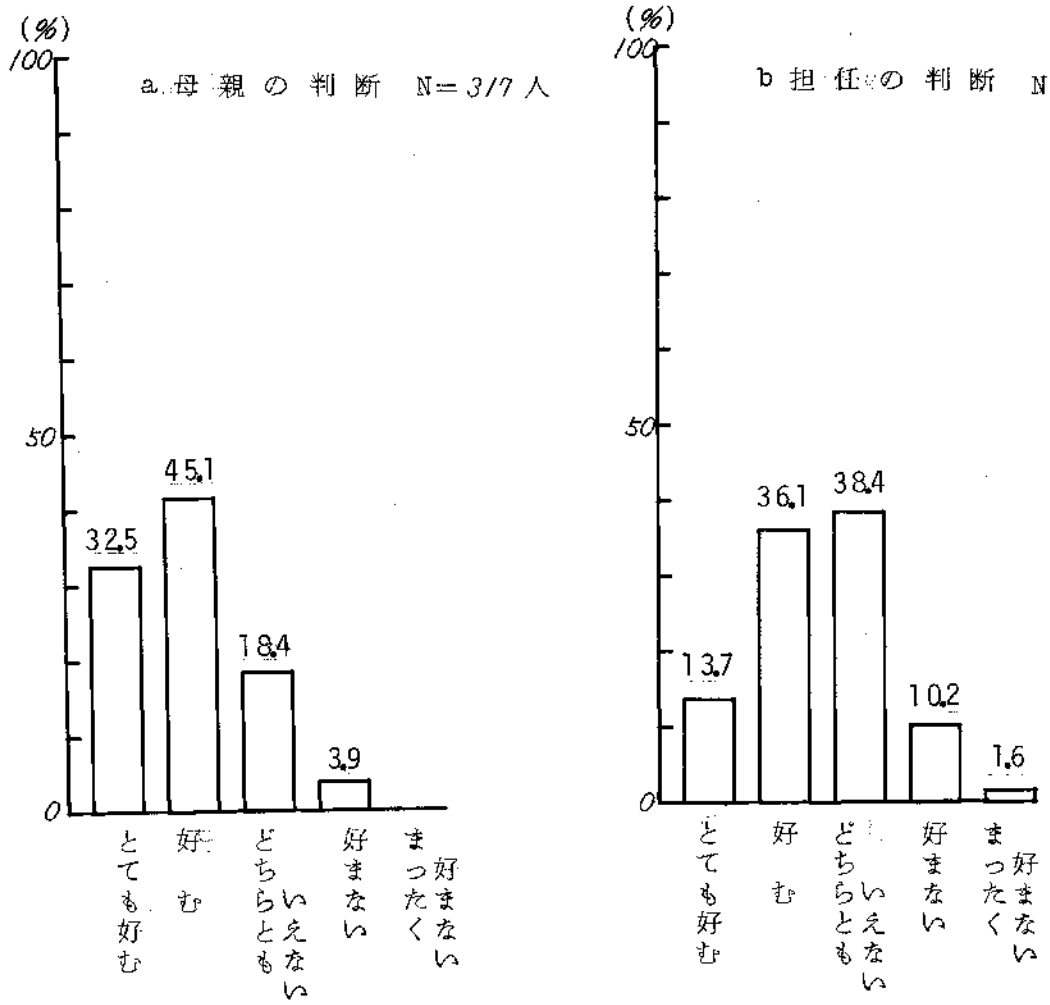


図-10　子どもが身体活動を好む・好まないという意識

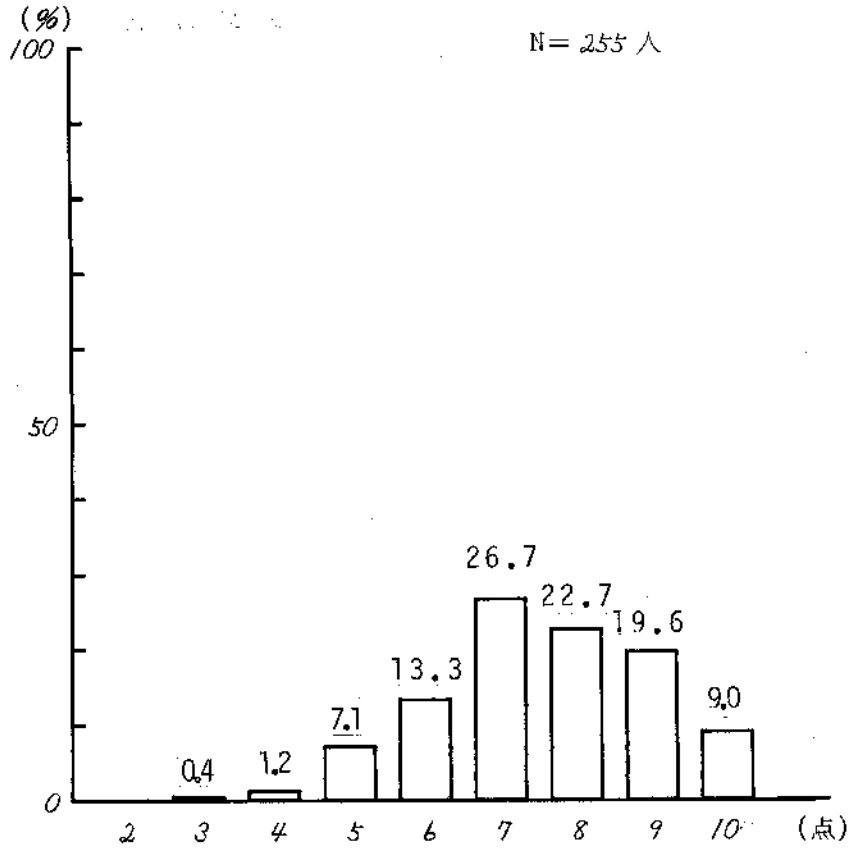


図-11　評点尺度

(2) 身体活動を好む・好まないという意識と身体活動の現状

1) 歩行

現在，子どもが歩くことを好むか，いやがらないかという歩行状況との関係についてみると，図-12に示したとおりである。身体活動

を「好む群」では「よく歩く」傾向がみられたが，両群の間には，有意差は認められなかった。しかしながら，「とてもよく歩く」子どもの占める割合を「好む群」と「好まない群」について比較したところ，「好む群」に有意に多くみられた。（P<0.01）

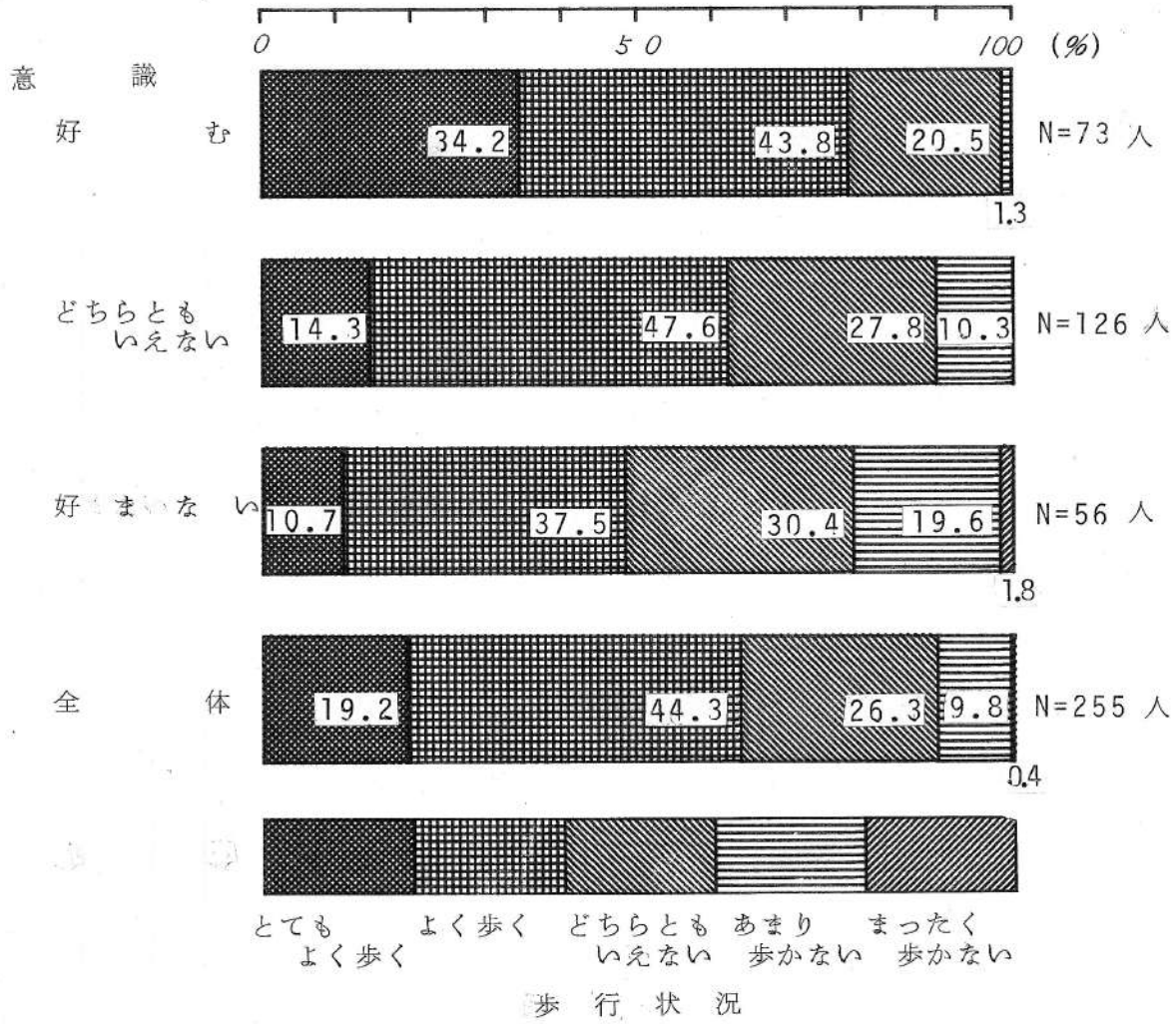


図-12　身体活動を好む・好まないという意識と現在の歩行状況（子ども）

2）戸外での遊びの頻度

次に戸外での遊びの頻度との関係は，図-13に示したとおりである。身体活動を「好む群」ほど「戸外での遊びが多い」という傾向にあり，両群の間には有意差（P<0.001）が認められた。

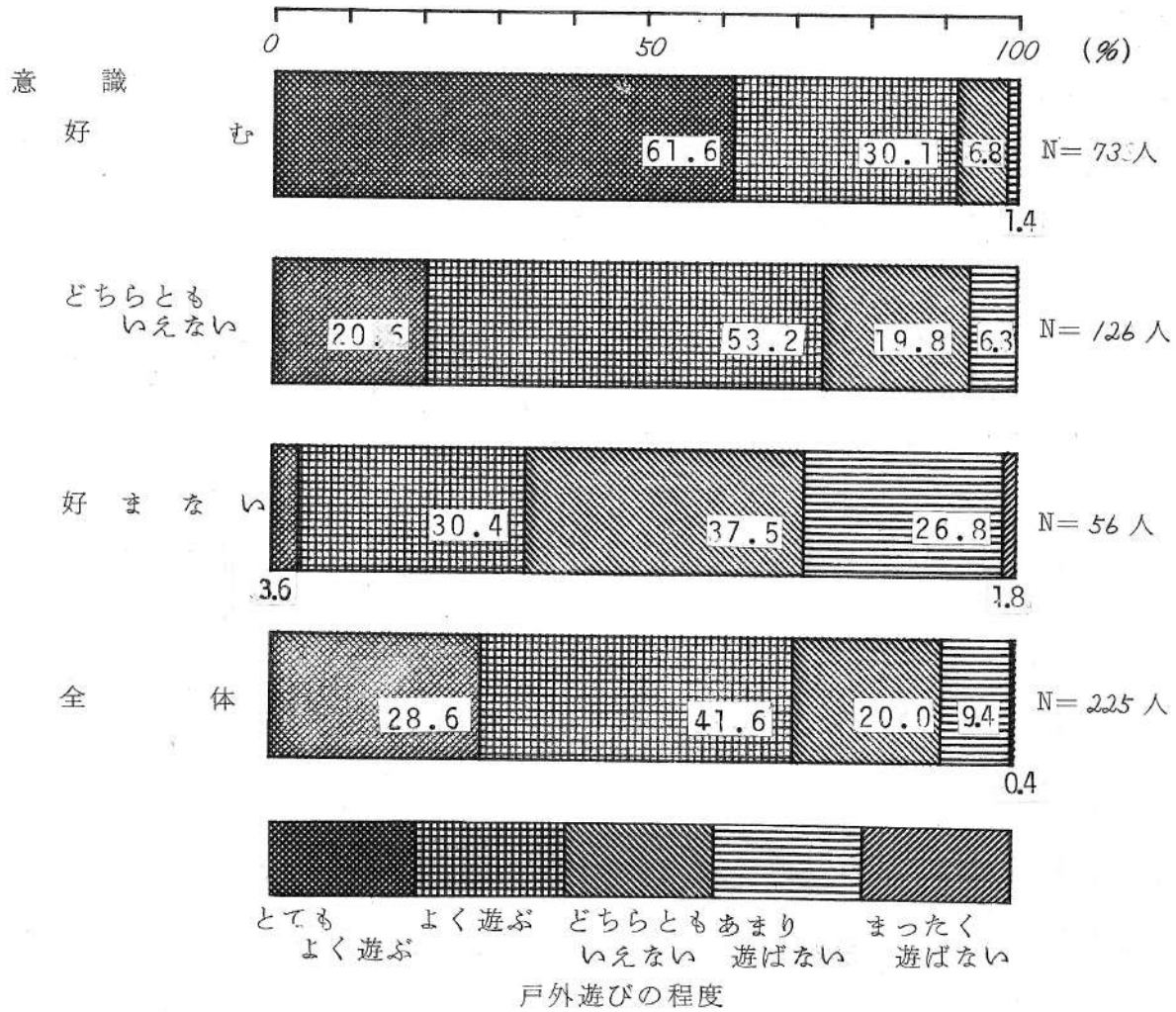


図-13　身体活動を好む・好まないという意識と現在の戸外遊びの程度（子ども）

3）遊び時間

まず，戸外での遊び時間についてみた結果が図-14である。身体活動を「好む群」ほど，戸外での遊び時間が長い傾向にあり，「好む群」の平均±1SD 2.35±1.11時間と「好まない群」の平均±1SD1.83±0.95時間との間には有意な差（P<0.01）が認められた。

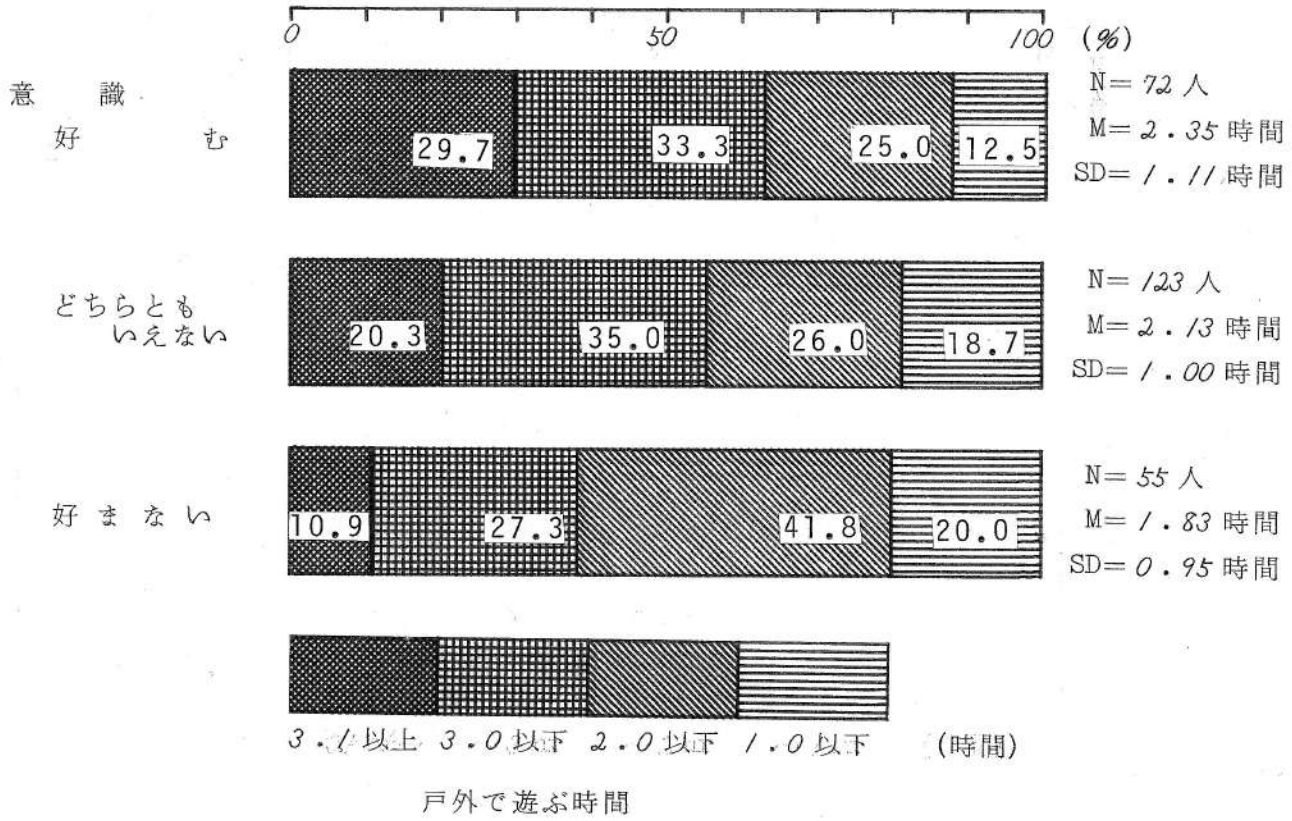


図-14　身体活動を好む・好まないという意識と戸外での遊ぶ時間（子ども）

次に，自宅室内での遊び時間について検討を加えた。その結果，図-15に示したように，「好む群」ほど室内での遊び時間が短かく，その平均±1SDは0.50±0.71時間であった。これは「好まない群」の平均±1SD 0.77±0.68に比べて有意（P<0.05）に短かった。

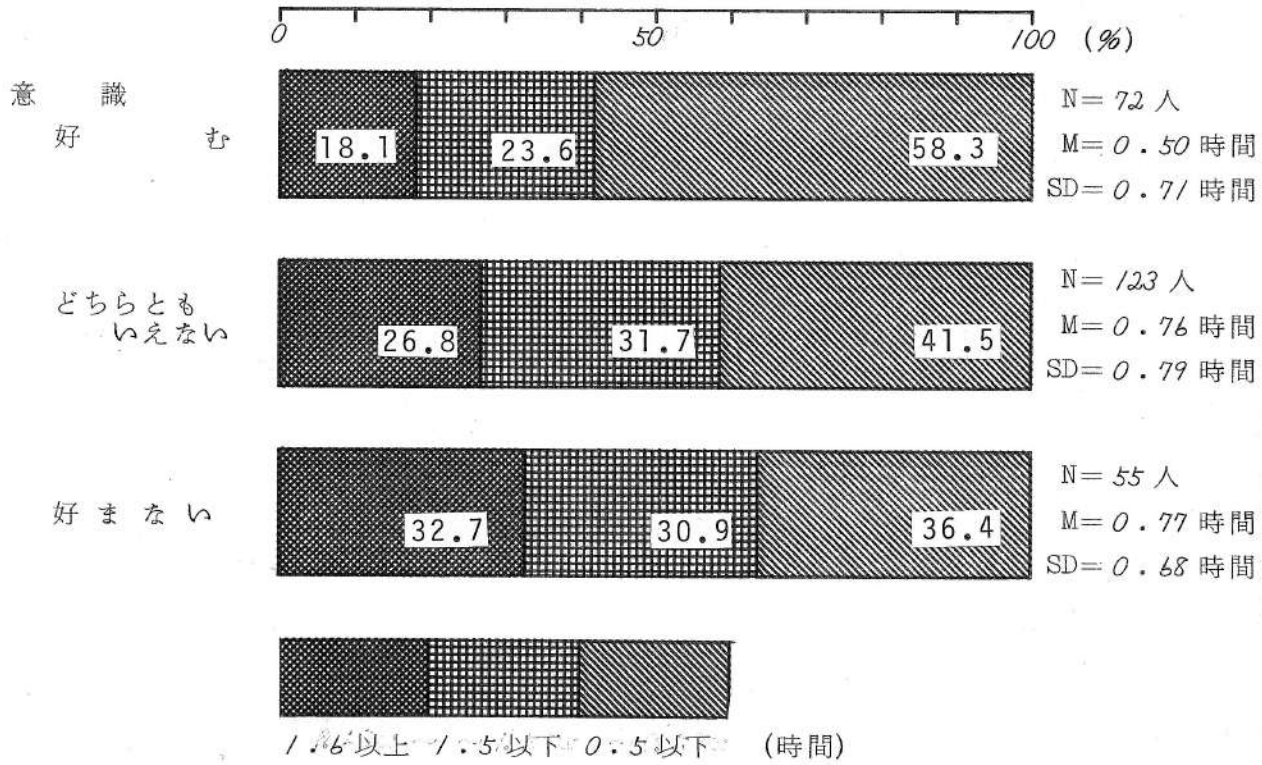


図-15　身体活動を好む・好まないという意識と室内での遊び時間（子ども）

4）遊び場

それぞれの群の主な遊び場所が戸外か，室内かについて検討した。図-16に示したように，室内を主な遊び場にしているのは，「好む群」より「好まない群」により多くみられ，両群の間には有意な差（$P<0.001$）が認められた。

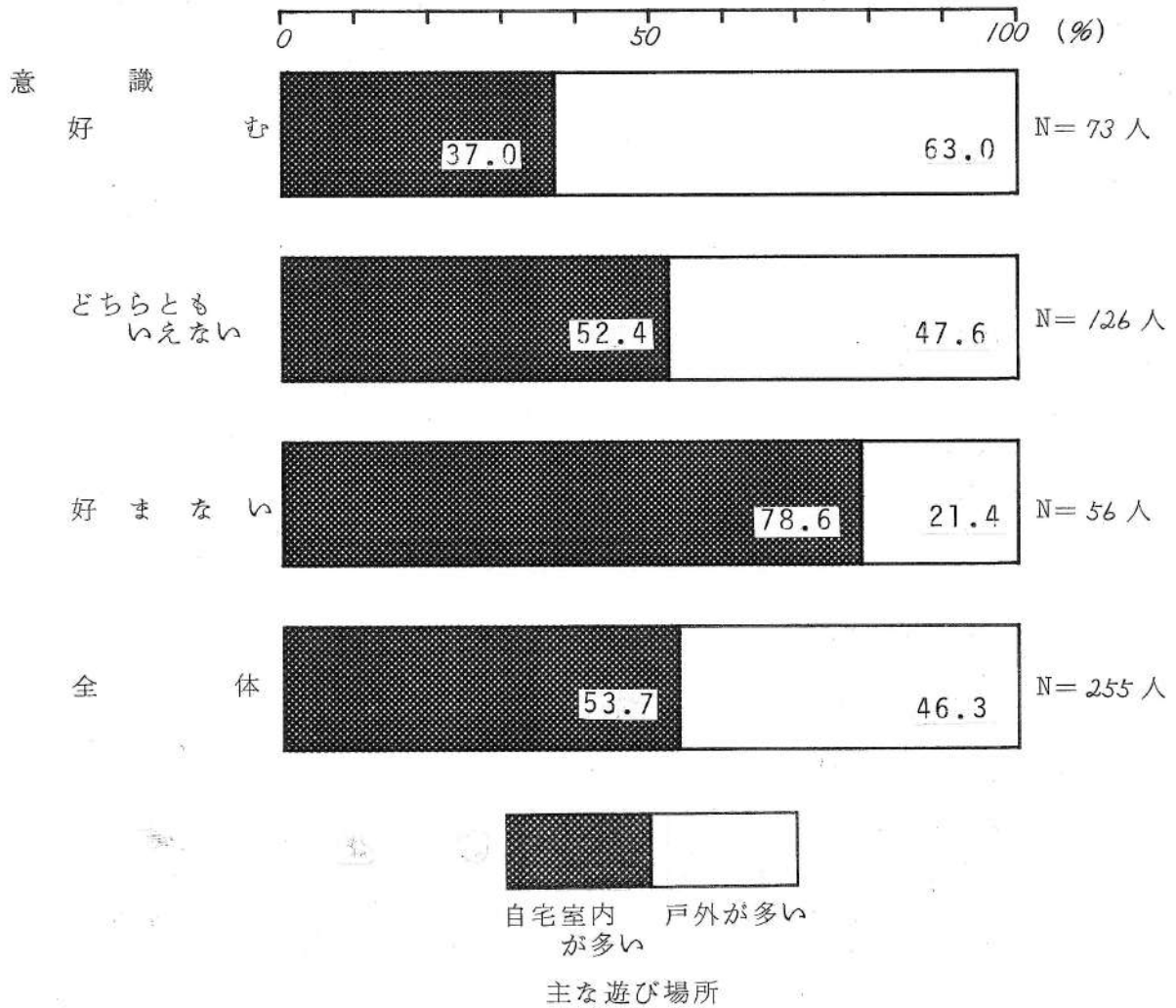


図-16　身体活動を好む・好まないという意識と現在の子どもの主な遊び場所

5）遊び友達

遊び友達の数との関係についてみた結果が図-17である。これによれば，身体活動を「好む群」の方が「好まない群」より遊び友達が有意に多かった。（P<0.001）

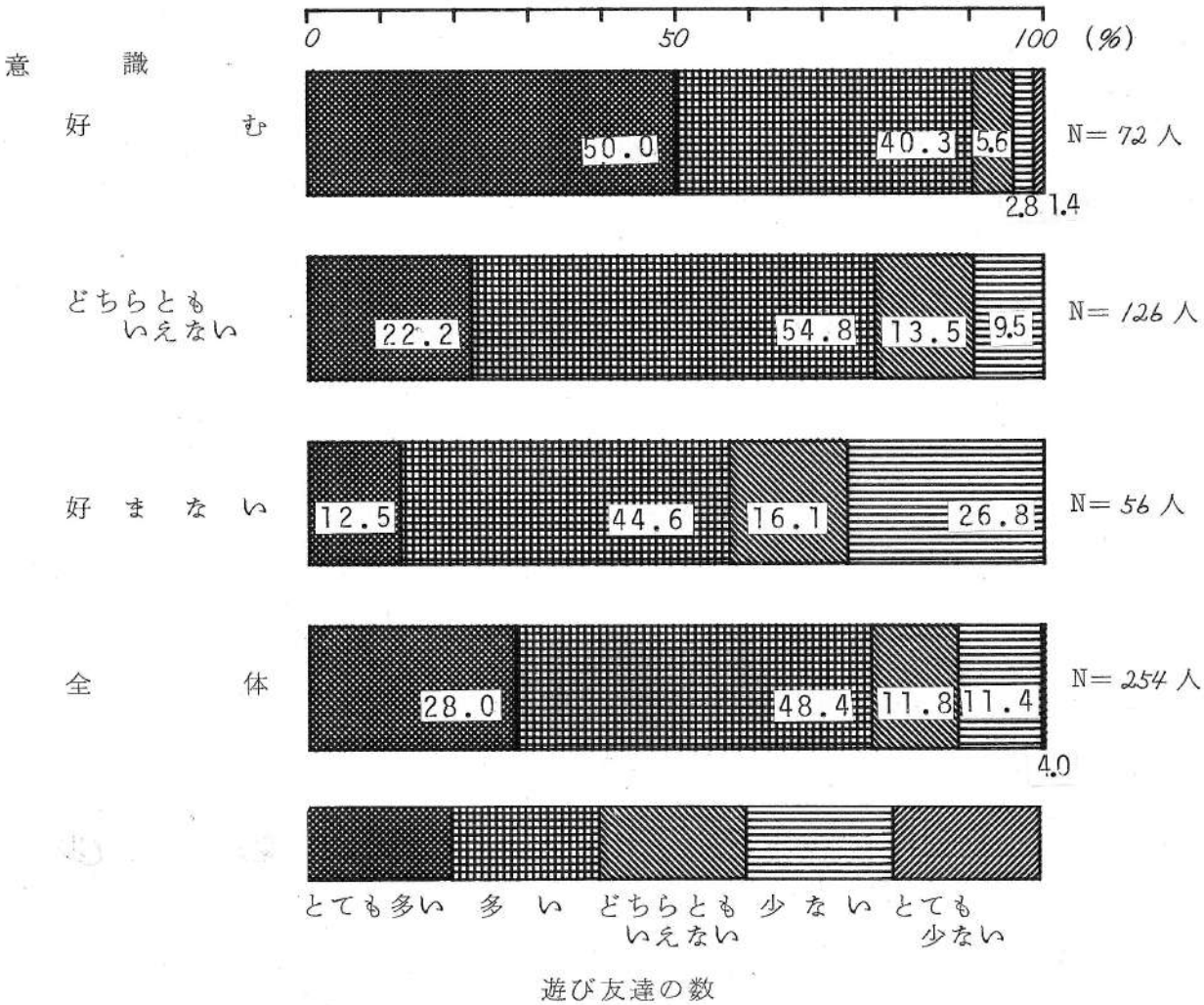


図-17　身体活動を好む・好まないという意識と現在の子どもの遊び友達の数

さらにこの結果に関連して，ひとり遊びの傾向についてみると，図-18に示したように，身体活動を「好まない群」の方が「ひとり遊び」が多いという傾向がみられ，有意な差（P<0.001）が認められた。

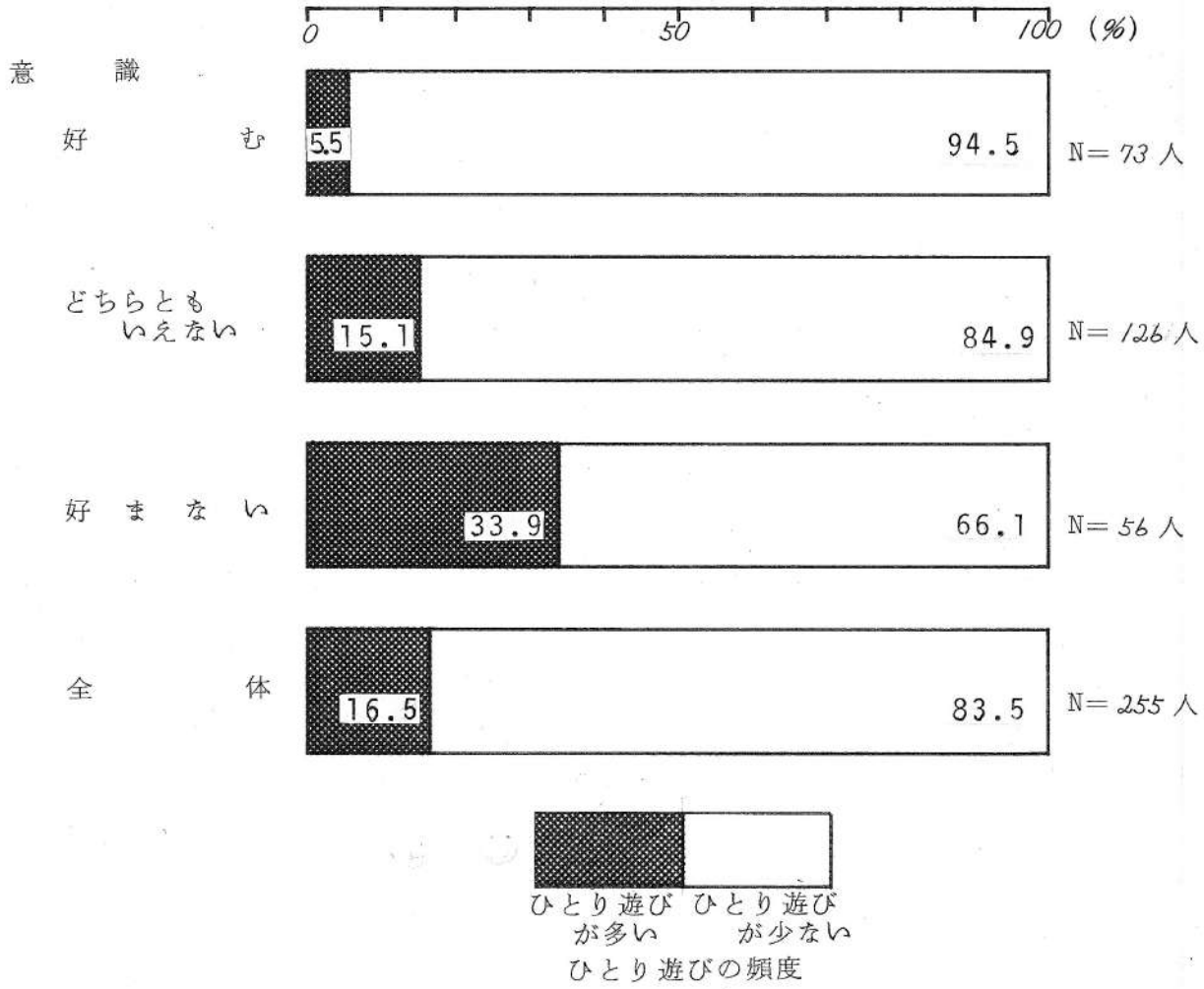


図-18　身体活動を好む・好まないという意識と現在の子どものひとり遊びの頻度

(3) 身体活動を好む・好まないという意識と健康状態

現在の子どもの健康状態との関連では，図-19に示したように，身体活動を「好む群」の方が「好まない群」に比べて健康状態の良好であるものの占める割合が高く，「好む群」と「好まない群」との間には，有意な差（P<0.001）が認められた。

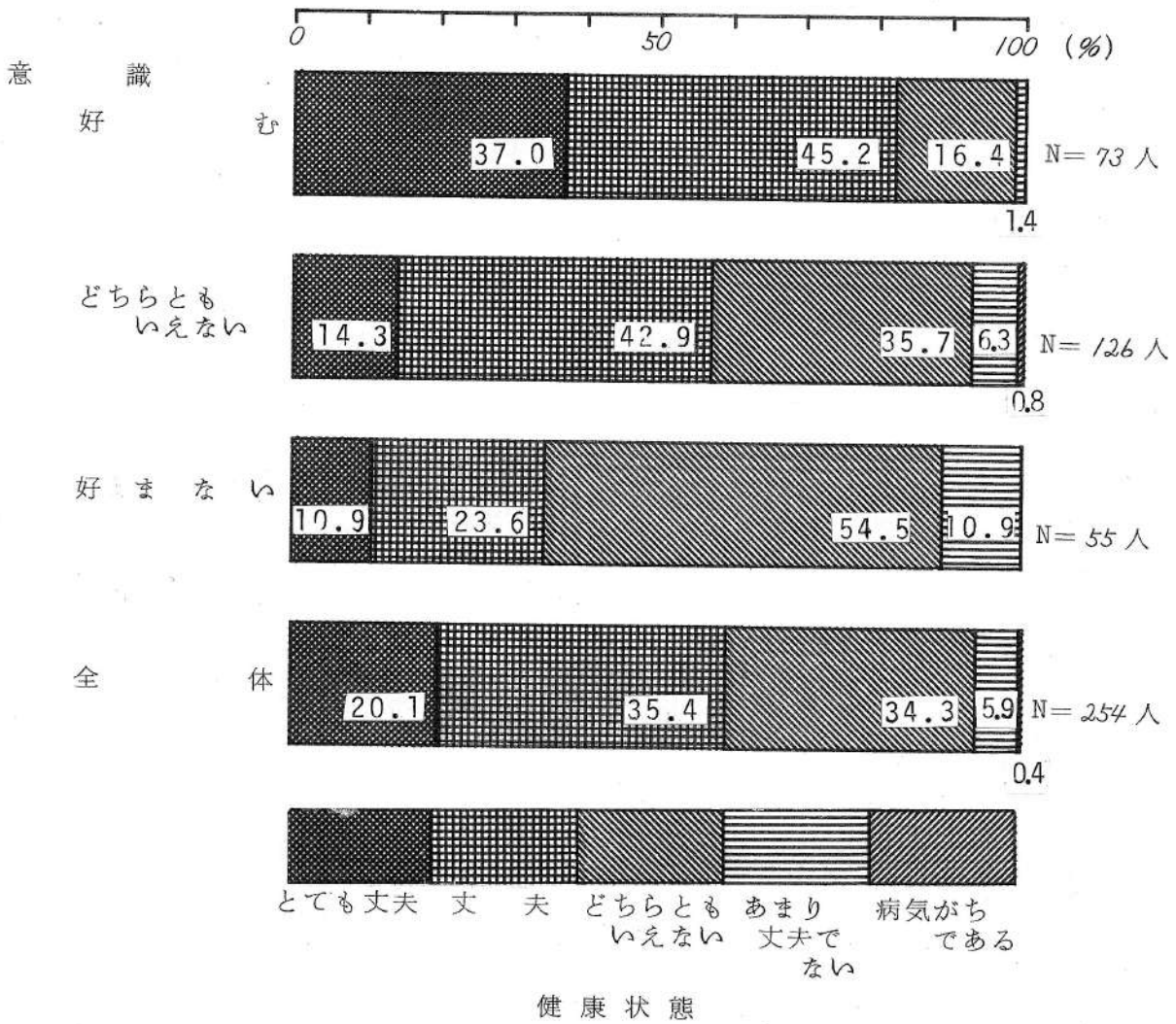


図-19　身体活動を好む・好まないという意識と子どもの健康状態（現在）

(4) その他の諸要因

その他の要因として，現在の子どもの居住地域，住居形態，居住階数，部屋数，居住年数，同胞，けいこごと・習いごとへの参加，睡眠時間、テレビ視聴時間，といった各要因について両群の比較検討を行なったが，いづれも有意差は認められなかった。

第5節 乳幼児期における母親の育て方と現在の子どもの身体活動

乳幼児期は，母親が子どもの将来の身体活動を助長するために，大切な時期であると考えられる。そのために，育児の中でどの様なことを母親が考え実行に移してきたのか。そして，この育て方が現在小学校1年の子どもの身体活動にどの程度効果を及ぼしているかという点について検討した。すなわち，身体活動を助長すると考えられる育て方として，①「子どもを戸外で遊ばせたか」②「子どもと外出した時歩いたか」③「子どもといっし

よに遊んだり，運動をしたか」④「子どもが遊びや運動をし易いような配慮をしたか」⑤「子どもがよごれて帰って来た時どう対処したか」⑥「子どもが遊びや運動で軽いケガをした時どうしたか」の6項目を設定した。それぞれの項目について，身体活動を好む・好まないという意識と戸外での遊び時間量との関連を検討した。

（1）子どもの身体活動を好む・好まないという意識との関連

母親が「子どもを戸外で遊ばせたかどうか」について，「遊ばせた」という積極的な母親群とそうでない消極的な母親群にわけ検討した。その結果は図-20に示した。積極群では，消極群に比べて身体活動を「好む子ども」が多く，「好まない子ども」が少ない傾向を示した。積極群と消極群との間には有意な差が認められた。（$P<0.01$）

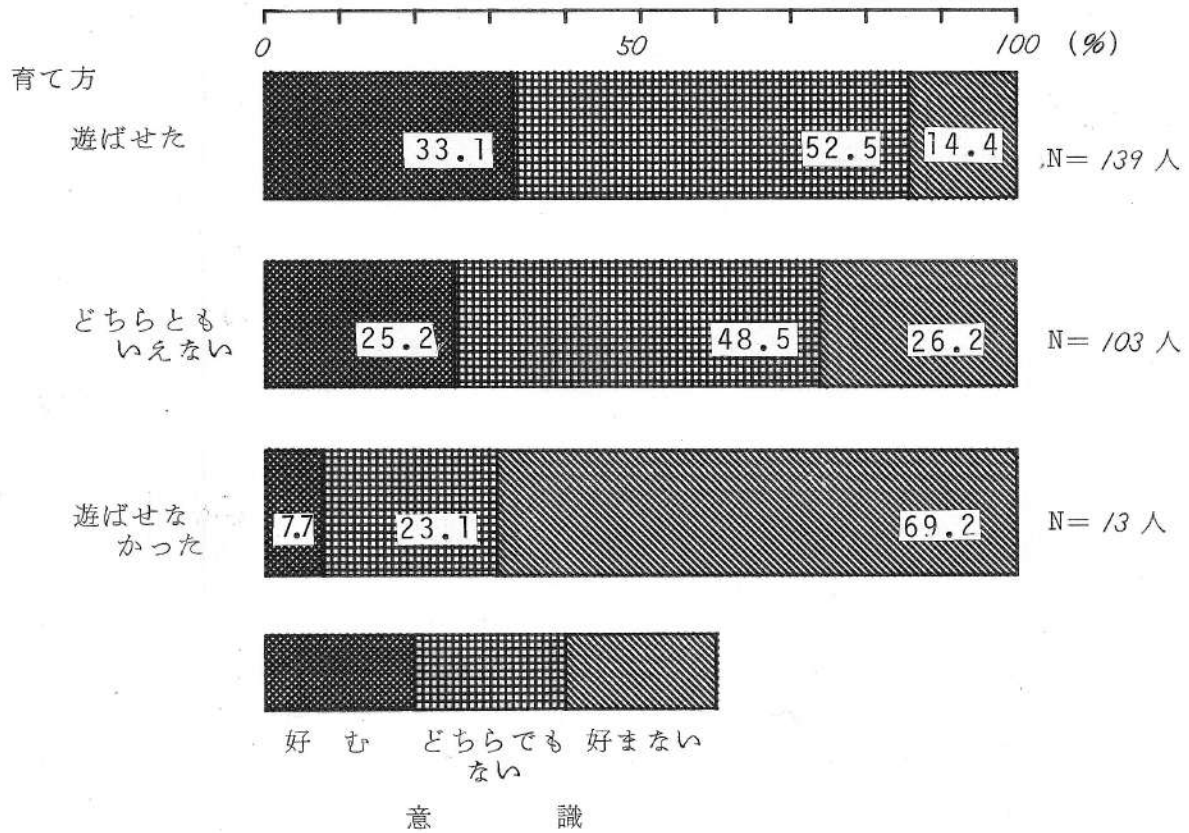


図-20　子どもを戸外で遊ばせる育て方と子どもの身体活動を好む・好まないという意識

次に，母親の育て方として「子どもといっしょに遊んだり，運動したか」という点について「いっしょに遊んだ」という積極群と「いっしょに遊ばなかった」という消極群とにわけ比較した。図-21に示したとおり，「いっしょに遊んだり運動した」という育て方のいかんにかかわらず，身体活動を「好む群」

と「好まない群」の占める割合に有意な差はなかった。しかし，「好まない群」のみについてみると「いっしょに遊んだ」という積極群は14.5%（12人）であったが，消極群では32.6%（15人）であり，両者に有意な差が認められた。（P<0.05）

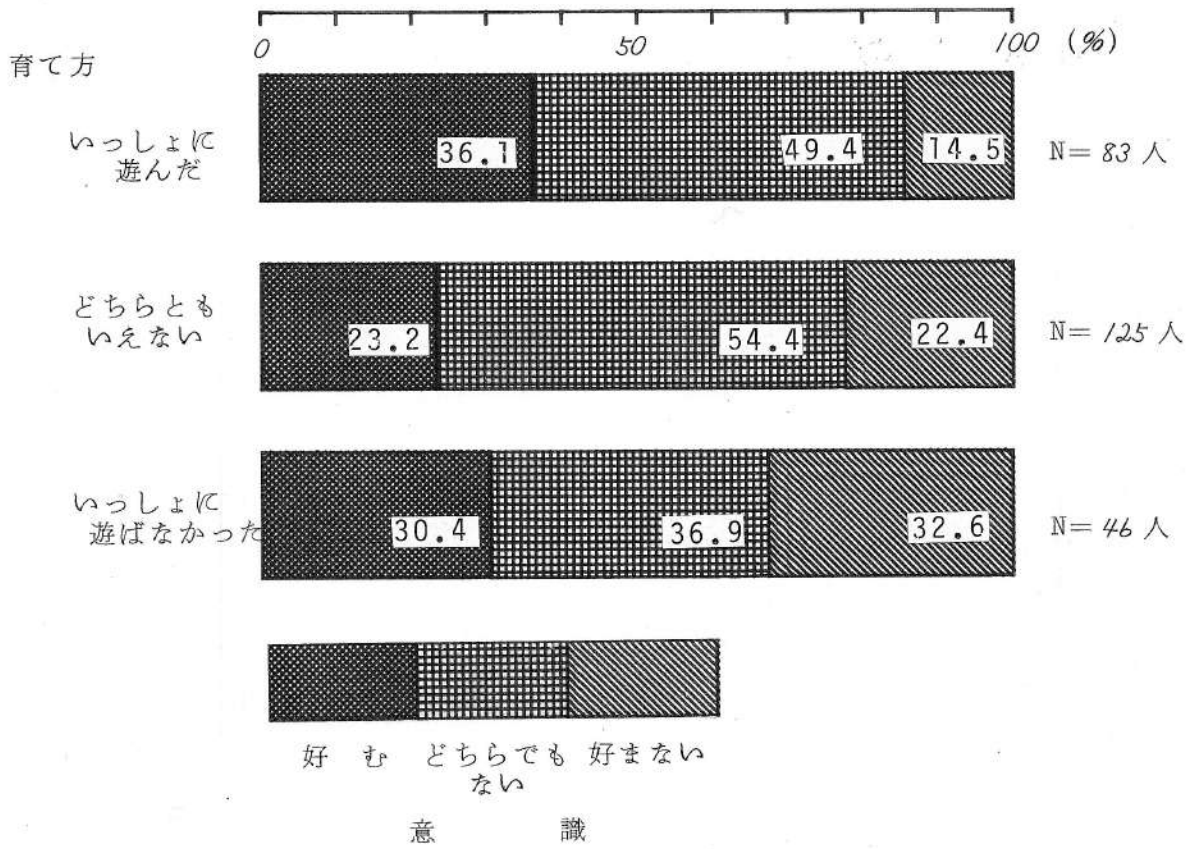


図-21　子どもといっしょに遊んだり、運動したりという育て方と子どもの身体活動を好む・好まないという意識

その他の身体活動を助長すると考えられる育て方の4項目について，子どもが身体活動を「好む群」と「好まない群」とに分けて検討したが，いずれも有意な差は認められなかった。

（2）子どもの戸外での遊び時間との関連

身体活動を助長すると考えられる母親の育て方に関する6項目が現在の子どもの戸外で遊ぶ時間に，どの程度影響をもたらしているかについて検討した。

まず，「子どもを戸外で遊ばせる」という育て方について，「遊ばせた」とする積極群と「遊ばせなかった」とする消極群にわけ，両群における子どもの戸外遊び時間について比較した。図-22に示したとおり，積極群の子どもの戸外遊びの平均±1SD時間は，2.26±0.98時間であり，一方消極群は1.62±1.16時間となっており，積極群は消極群に比べて戸外で遊ぶ時間が有意（$P<0.05$）に長かった。

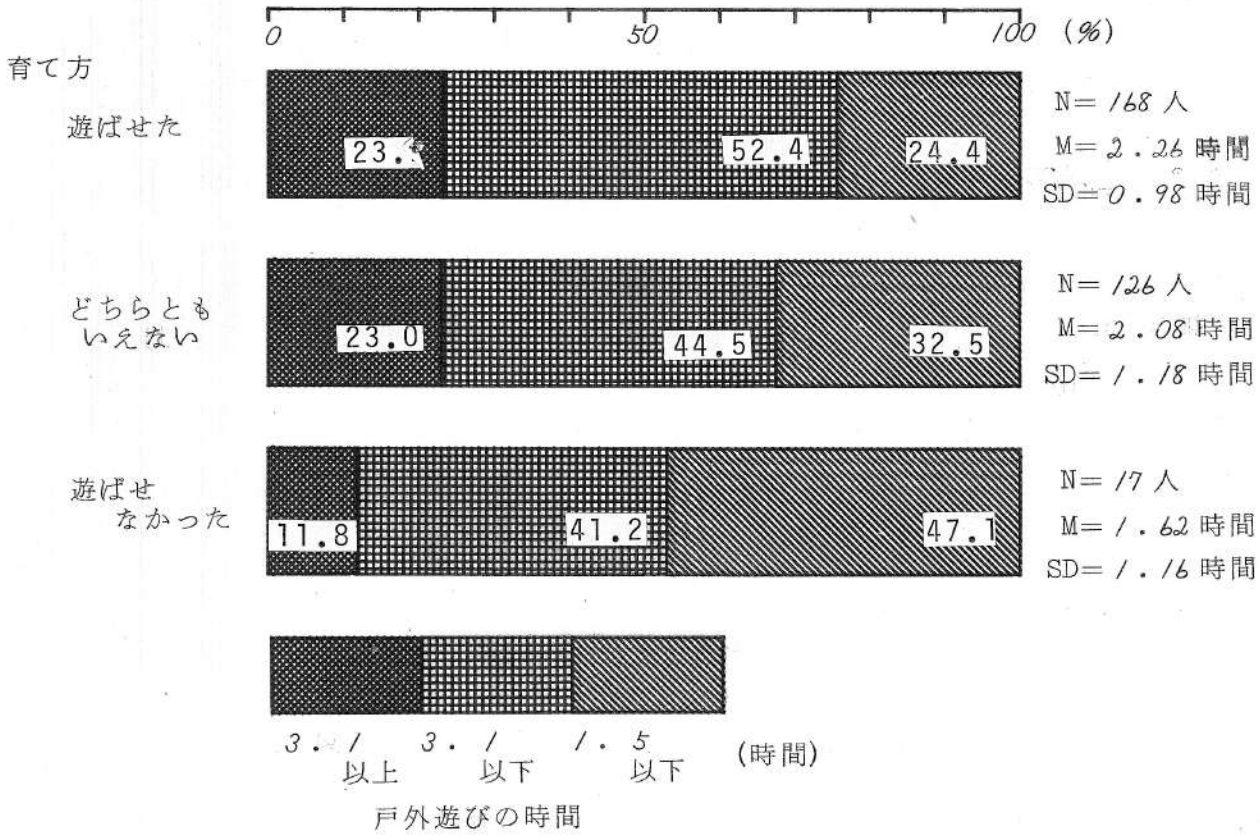


図-22　子どもを戸外で遊ばせる育て方と
子どもの外遊びの時間

身体活動を助長すると考えられる母親の育て方についての他の5項目と戸外で遊ぶ時間との関係について検討したが，いずれも有意な差は認められなかった。

第6節 「子どもを戸外で遊ばせる」育て方と子どもの身体活動の現状および健康

身体活動を助長すると考えられる母親の育て方のうち，現在，子どもの身体活動を好む・好まないという意識と戸外での遊び時間とに影響をもたらしたとみられる育て方としては，「子どもを戸外で遊ばせた」ということだけであった。ここでは，「子どもを戸外で遊ばせた」という育て方に関し，このような育て方に積極的な母親群と消極的な母親群とに2分し，以下に挙げる，子どもの遊びに関する現状および健康状態について検討を加えた。

(1) 戸外での遊びの頻度が多いか，否かとの関連

「戸外で遊ばせる」という育て方と「現在子どもが戸外でよく遊ぶか否か」という点についてみた結果を図-23に示した。これによると積極的な群の方が，消極的な群に比べて現在の「子どもの戸外での遊び」の頻度が有

意に多い傾向が認められた。（P<0.001）

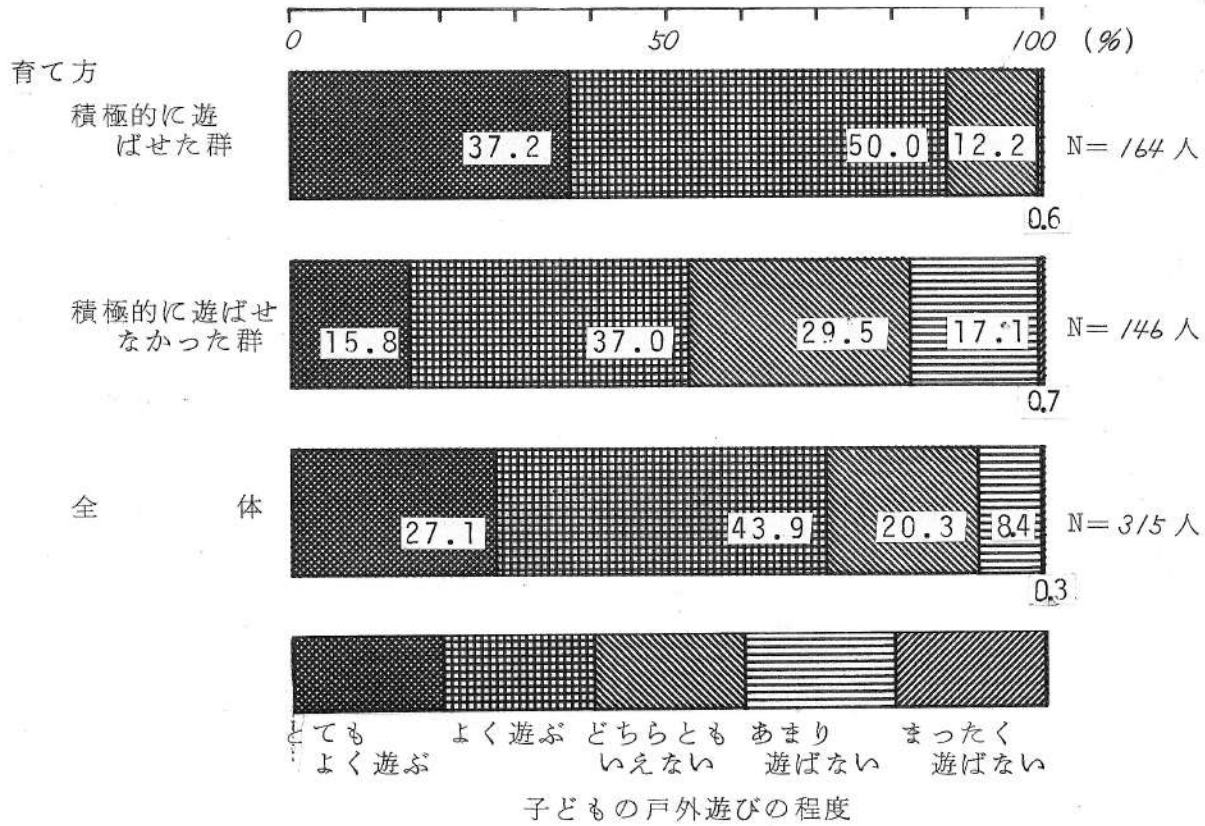


図-23　子どもを戸外で遊ばせる育て方と現在の子どもの戸外遊びの程度

（2）遊び友達および遊び場との関連

「子どもを戸外で遊ばせた」という育て方が、現在の遊び友達や遊び場にどのような影響をもたらしているかという点について検討した。

まず，子どもの遊び友達の数との関連についてみると，図-24に示したとおり，「戸外で遊ばせる」ことに積極的であった母親群の子どもは，消極的であった母親群の子どもに比べて遊び友達が多い傾向にあることが認められた。（P<0.05）また，これに関連して「

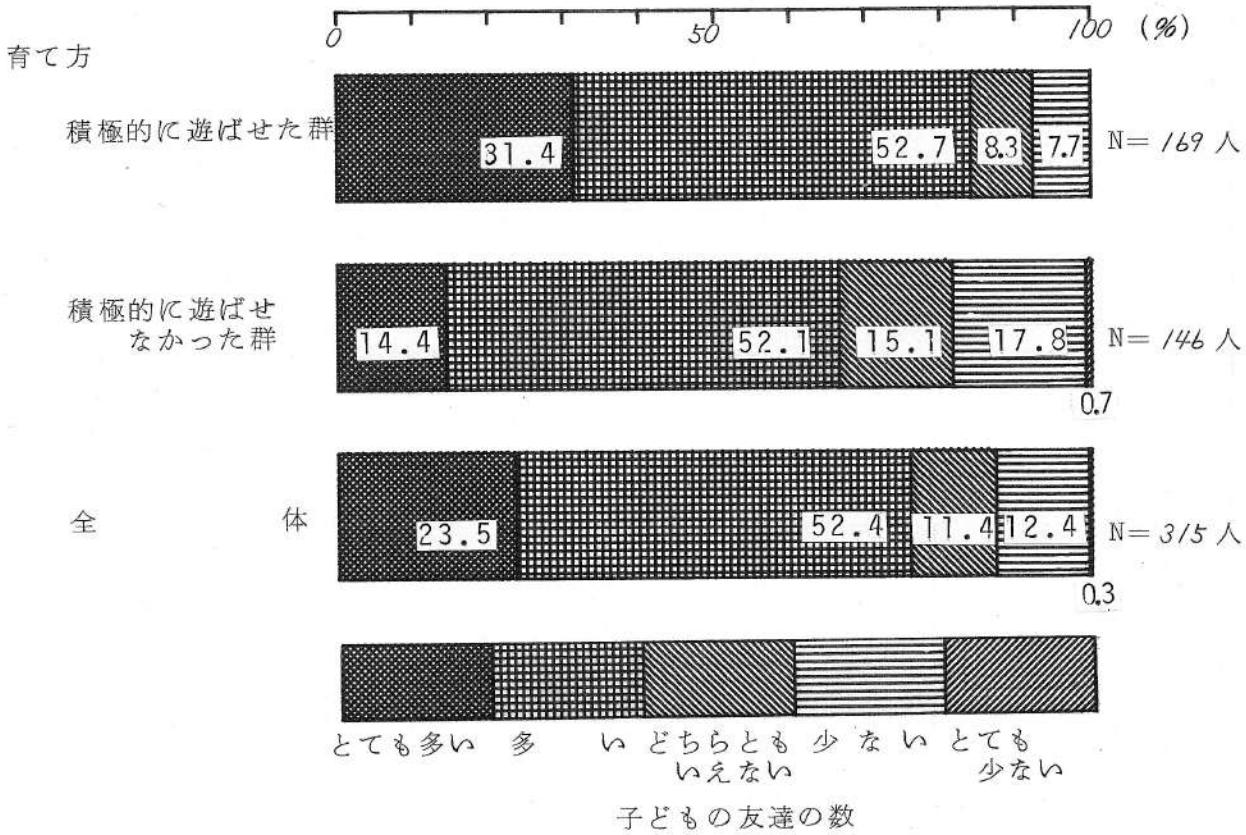


図-24　子どもを戸外で遊ばせる育て方と現在の子どもの遊び友達の数

ひとり遊びをよくするかどうか」についてみると、「戸外で遊ばせる」ことに積極的であった母親群の子どもに「ひとり遊びが少なく」消極的であった母親群の子どもに「ひとり遊び」が有意に多かった。（P<0.05，図-25）

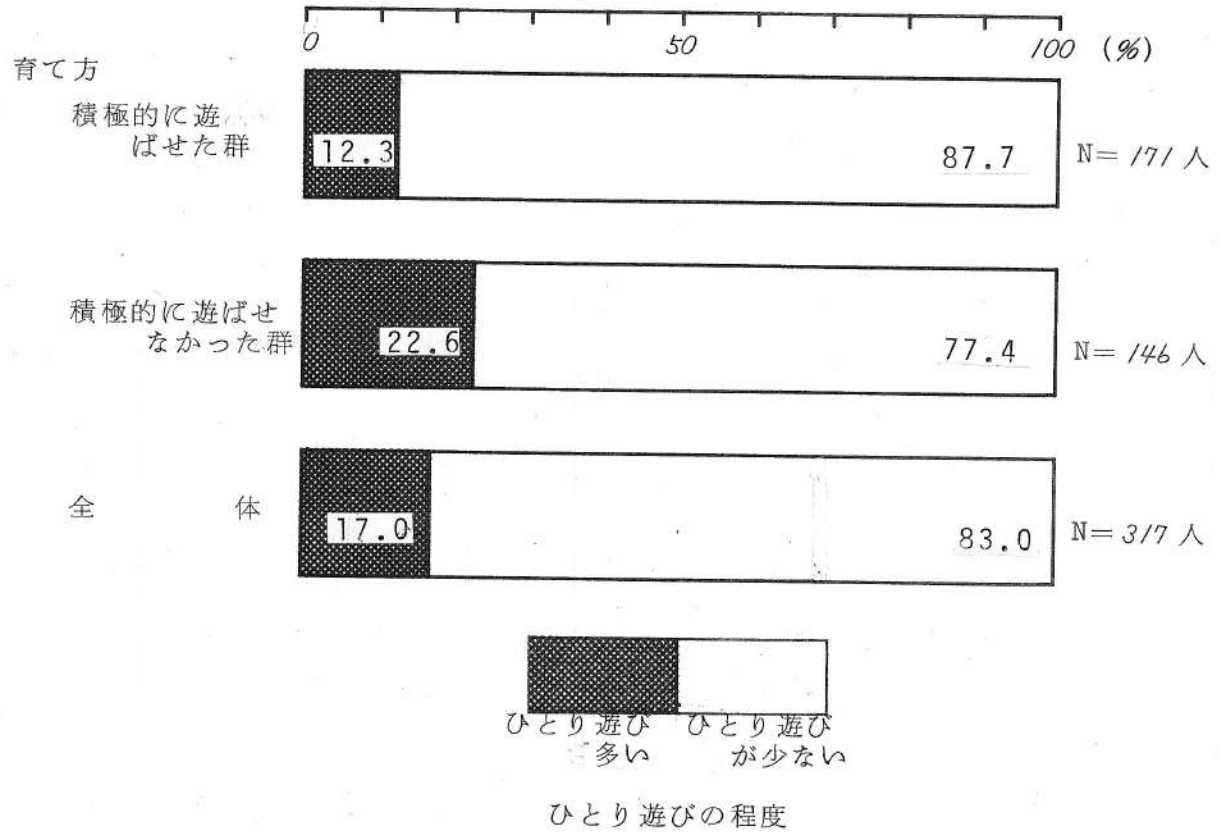


図-25　子どもを戸外で遊ばせる育て方と現在の子どものひとり遊びの程度

次に，現在の子どもの遊び場を「自宅室内」と「戸外」のどちらの方が主になっているかという点についてみると図-26に示したとおりである。「戸外で遊ばせる」という育て方に積極的であった母親群の子どもは，「自宅室内」を主な遊び場にすることが少なく，消極的であった母親群の子どもは「自宅室内」を主な遊び場とすることが有意に多かった（$P<0.05$）

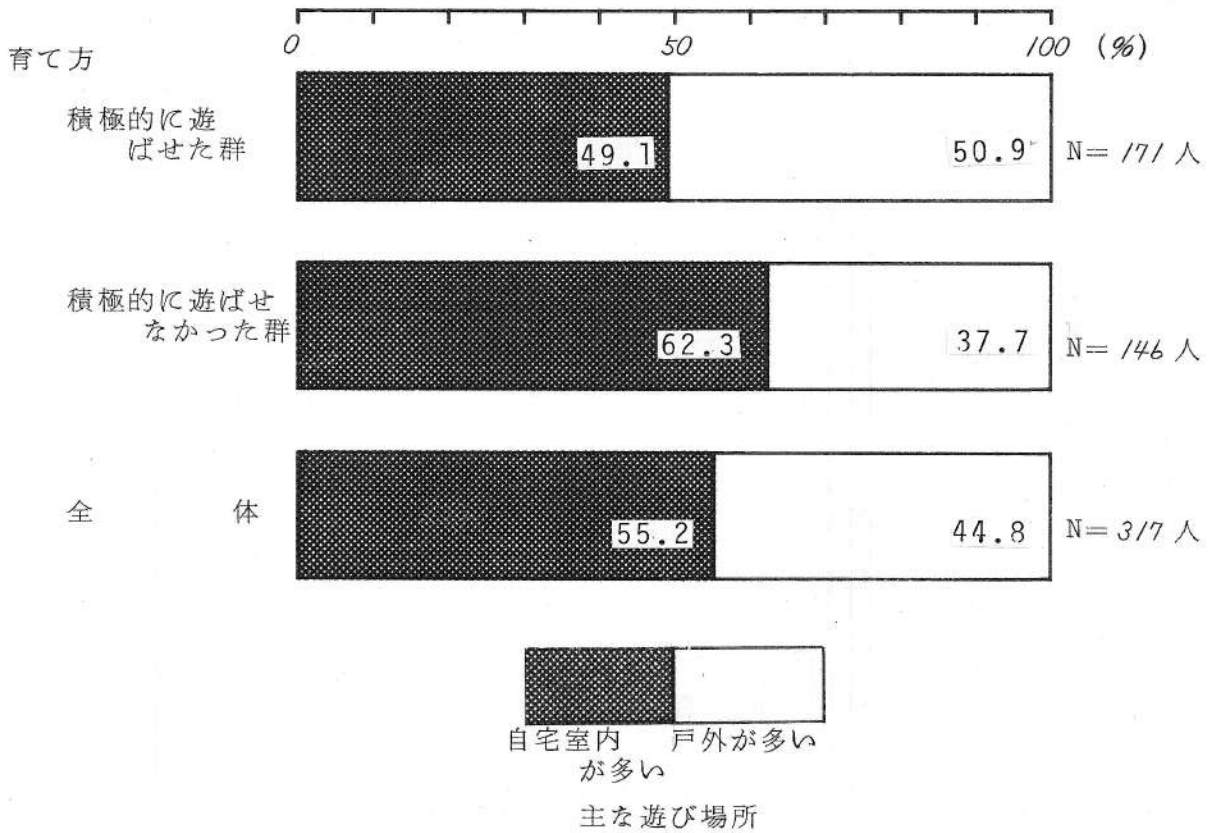


図-26　子どもを戸外で遊ばせる育て方と現在の子どもの主な遊び場所

(3) 現在の子どもの健康状態との関連

「子どもを戸外で遊ばせた」という育て方が，現在の子どもの健康状態と関連があるかどうかという点について検討した。

図-27に示したごとく，戸外で遊ばせることに消極的であった母親群の子どもに比べて積極的であった母親群の子どもに「とても丈夫である」または「丈夫である」といった健康状態の良好とみられる子どもが有意に多かった。($P<0.001$)

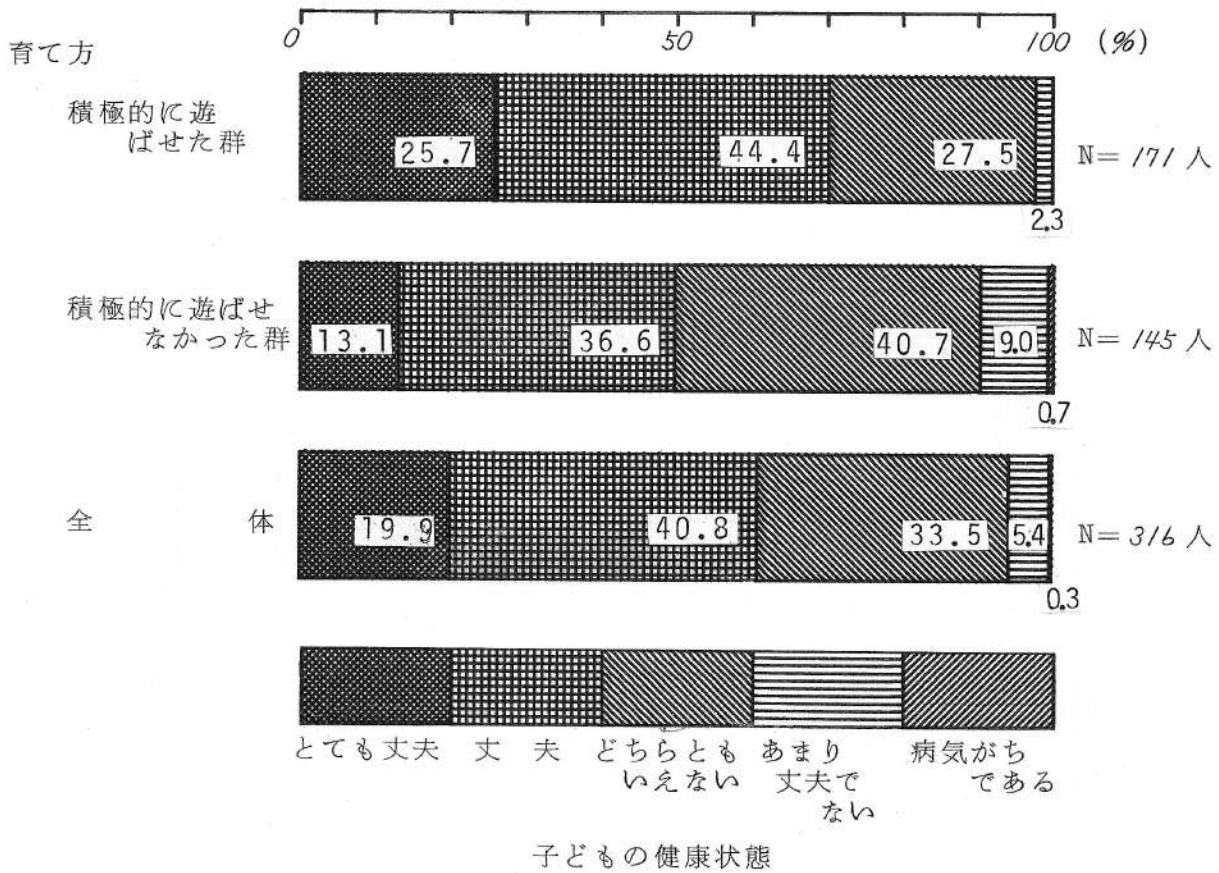


図-27 子どもを戸外で遊ばせる育て方と現在の子どもの健康状態

第7節　子どもの身体活動を助長すると考えられる母親の育て方を促す諸要因

ここまでは，子どもの身体活動を助長すると考えられる母親の育て方に関する事柄について検討してきた。その中で，とりわけ「子どもを戸外で遊ばせる」ことに母親が積極的であったか否かということが，現在の子どもの身体活動のあり方に強い影響をもたらしていることがうかがえた。

それでは，「子どもを戸外で遊ばせる」という育て方は，いかなる要因によってその実施が規定されているのであろうか。ここではこの点について検討することにした。

(1)　住居形態との関連

母親の育て方に差異が生まれるとすれば，それは，一つに住居形態による違いが予想される。今回は，現在まで同じ住居に5年以上居住している母親178人を選び比較検討した。

この178人について，一戸建住宅居住の母親75人と集合住宅居住の103人の2群に分け

て比較した結果は図-28に示したとおりであった。

その結果，一戸建住宅居住の母親より集合住宅居住の母親の方が子どもを戸外で積極的に遊ばせていたことがわかり，この住居形態の違いによる差は有意であった。（P<0.05）

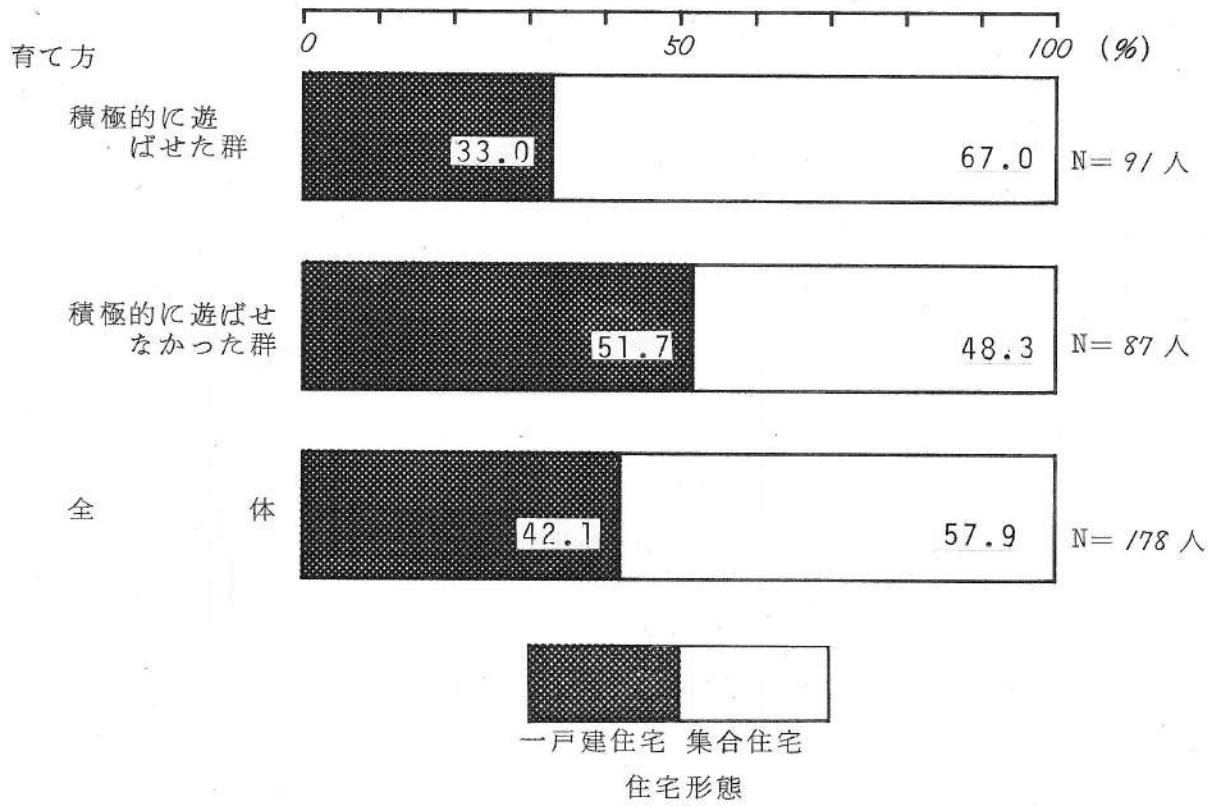


図-28　子どもを戸外で遊ばせる育て方と住居形態（居住年数5年以上）

（2） 母親の教育年数との関連

次に，教育年数の上から検討してみた。「子どもを戸外で遊ばせる」ことに積極的であった母親群の平均教育年数は，12.80±1.67年であり，一方消極的であった母親群では，12.41±1.57年で積極的な群の方がやや長いという結果であったが，その差は有意ではなかった。

（3） 学校卒業後から現在にいたるまでの母親の健康状態との関連

母親の育児に対する姿勢は，当然のことながら学校卒業から現在に至るまでの間の健康状態によっても，違いが生ずることが予想される。そこでこの期間の健康状態との関係において検討してみた。

その結果は，図-29に示したとおりであるが，「子どもを戸外で遊ばせる」事を積極的に実施した母親群の方が，消極的な群に比べておおむね健康状態が良好である傾向がみられたが，有意な差はなかった。

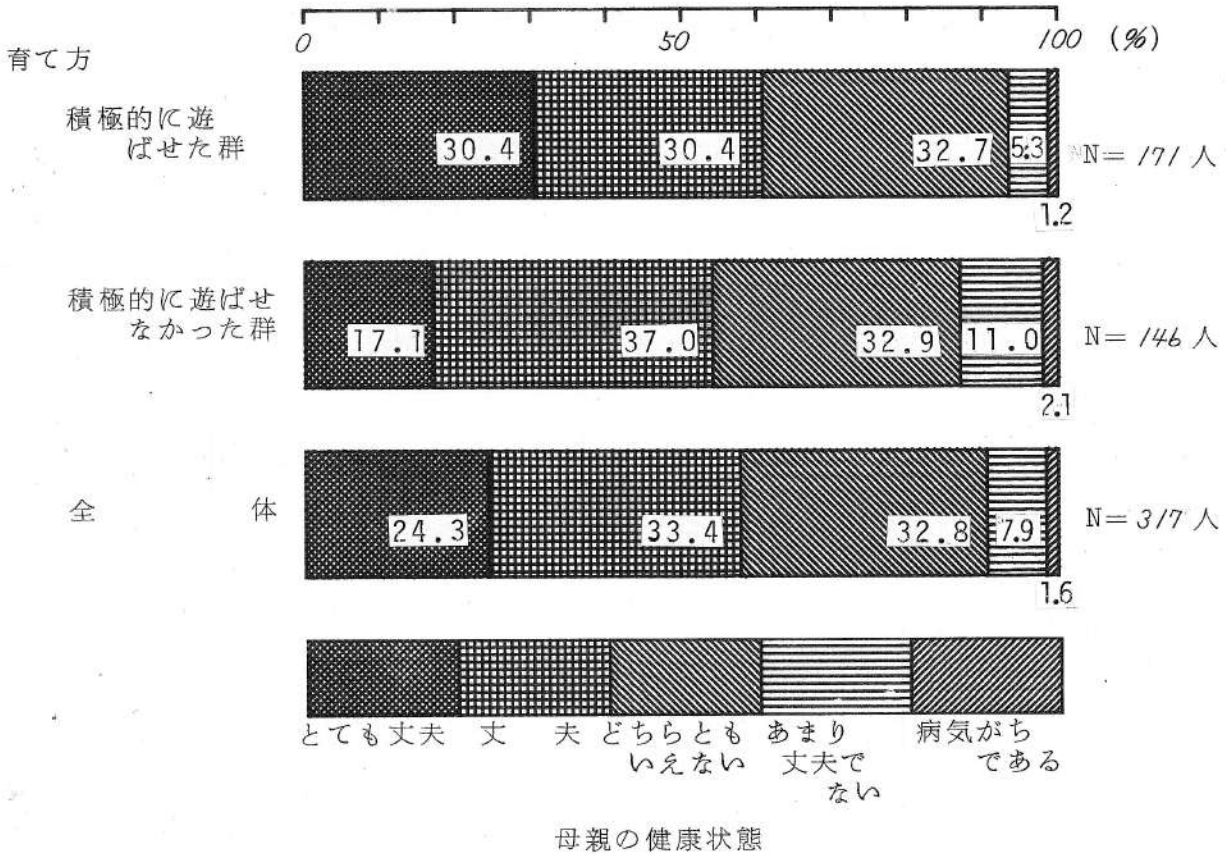


図-29　子どもを戸外で遊ばせる育て方と母親の学校卒業後、現在に至るまでの健康状態

(4)　各ライフ・ステージにおける母親の身体活動を好む・好まないという意識との関連

母親の育児に対する姿勢は，その人が今日まで生きてきた過程において，いかなる身体活動への取り組み方をしてきたか，その違い

によっても左右されるであろう。そこで，ここでは母親の各ライフ・ステージを学童期，生徒・学生期，学校卒業後から現在に至るまでの期間，それぞれに分けて，そのステージ毎の身体活動への取り組み方について検討を加えた。

その結果，図-30から図-32に示したとおり「子どもを戸外で遊ばせる」ことに積極的であった母親群では，各ステージのうち特に学童期，生徒・学生期のいわゆる学校に通っている間に「身体活動が好きだった」とする者が多い傾向を示しており，積極的な母親群と消極的な母親群との間には，学童期，生徒・学生期ともに有意（$P<0.01$）な差が認められた。なお，学校卒業後から今日に至るまでの期間においても同様の傾向を示していたが，有意な差は認められなかった。

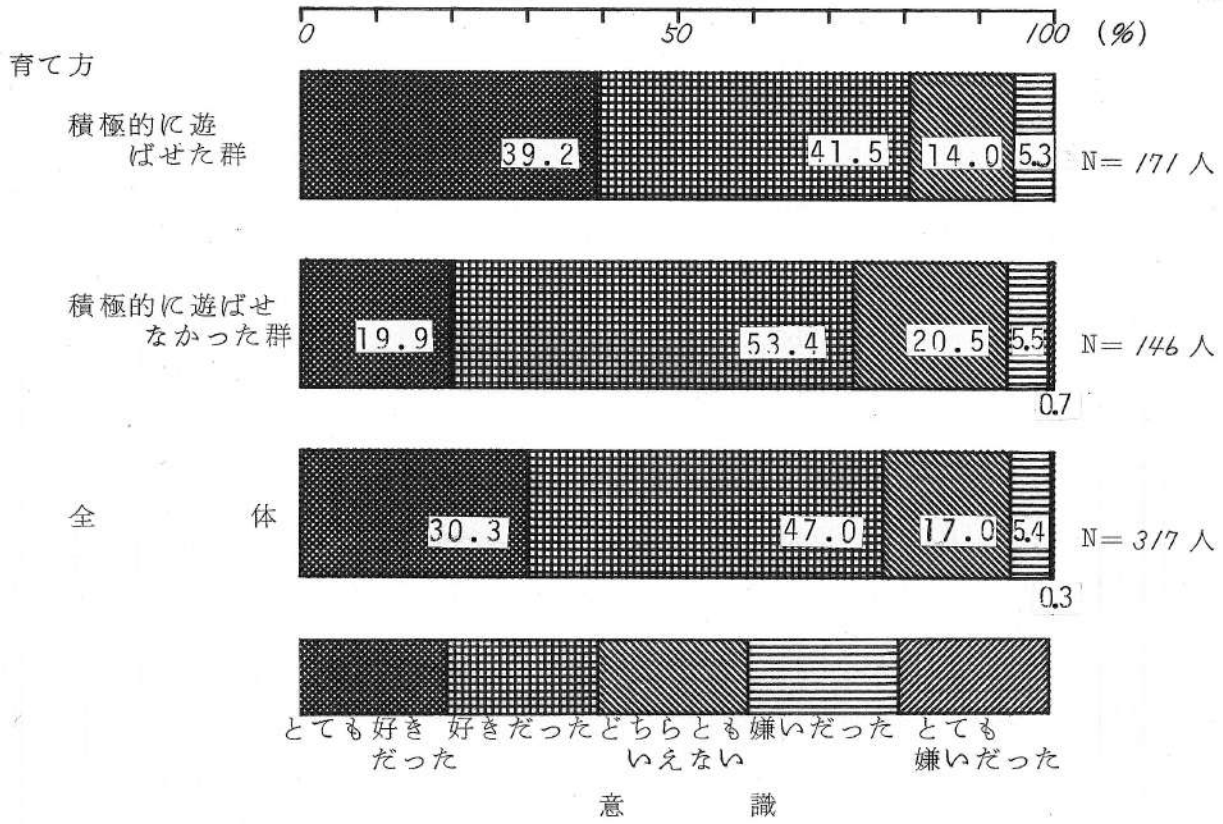


図-30　子どもを戸外で遊ばせる育て方と母親の学童期における身体活動を好む・好まないという意識

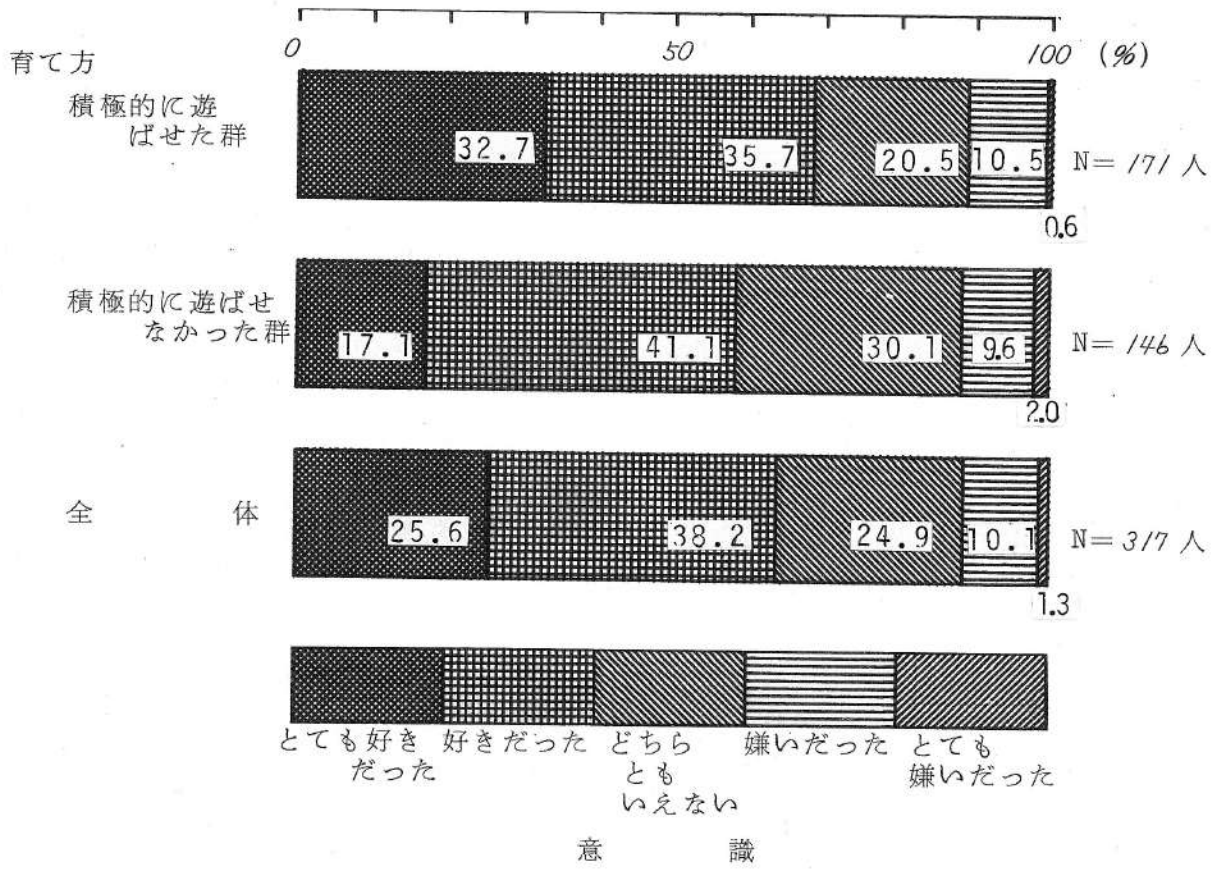


図-31　子どもを戸外で遊ばせる育て方と母親の生徒・学生期における身体活動を好き・好きないという意識

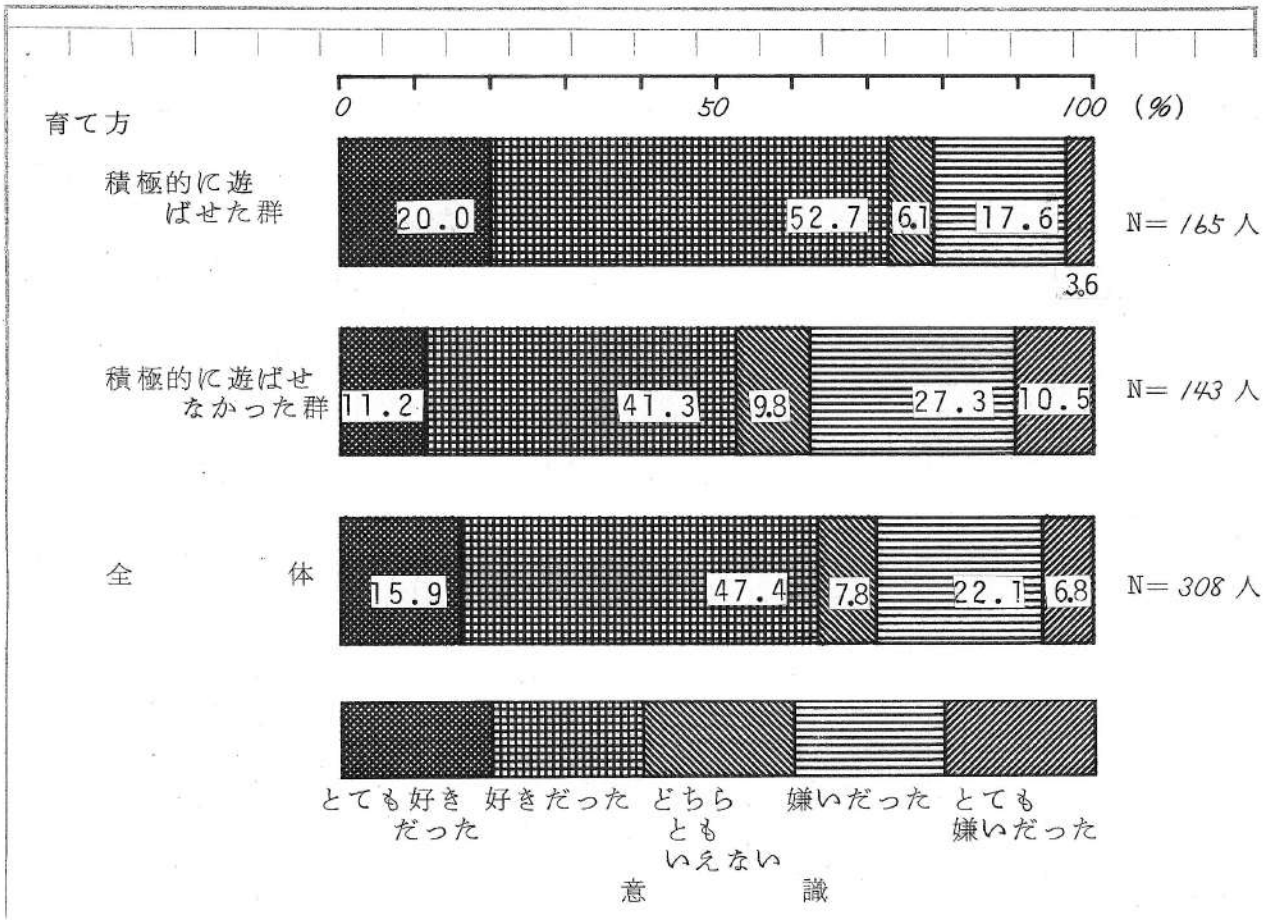


図-32　子どもを戸外で遊ばせる育て方と母親の学校卒業後、現在に至るまでの健康状態

（5）乳幼児期における育て方との関連

子どもの身体活動を助長すると考えられる母親の育て方に関する6項目のうち，「子どもと外出した時よく歩いた」「子どもといっしょに遊んだり運動した」「子どもが遊びや運動をし易いような配慮をした」という3項

目と「子どもを戸外で遊ばせた」という項目との関連について検討した。その結果は，図33から図-35に示したとおりであった。「子どもを戸外で遊ばせる」ことに積極的であった母親群は，3項目のいずれにおいても積極的に取り組み実施した傾向がみられた。「戸外で遊ばせる」ことに積極的であった母親群と消極的であった母親群との間には，3項目のいずれも有意な差が認められた。（P<0.001）

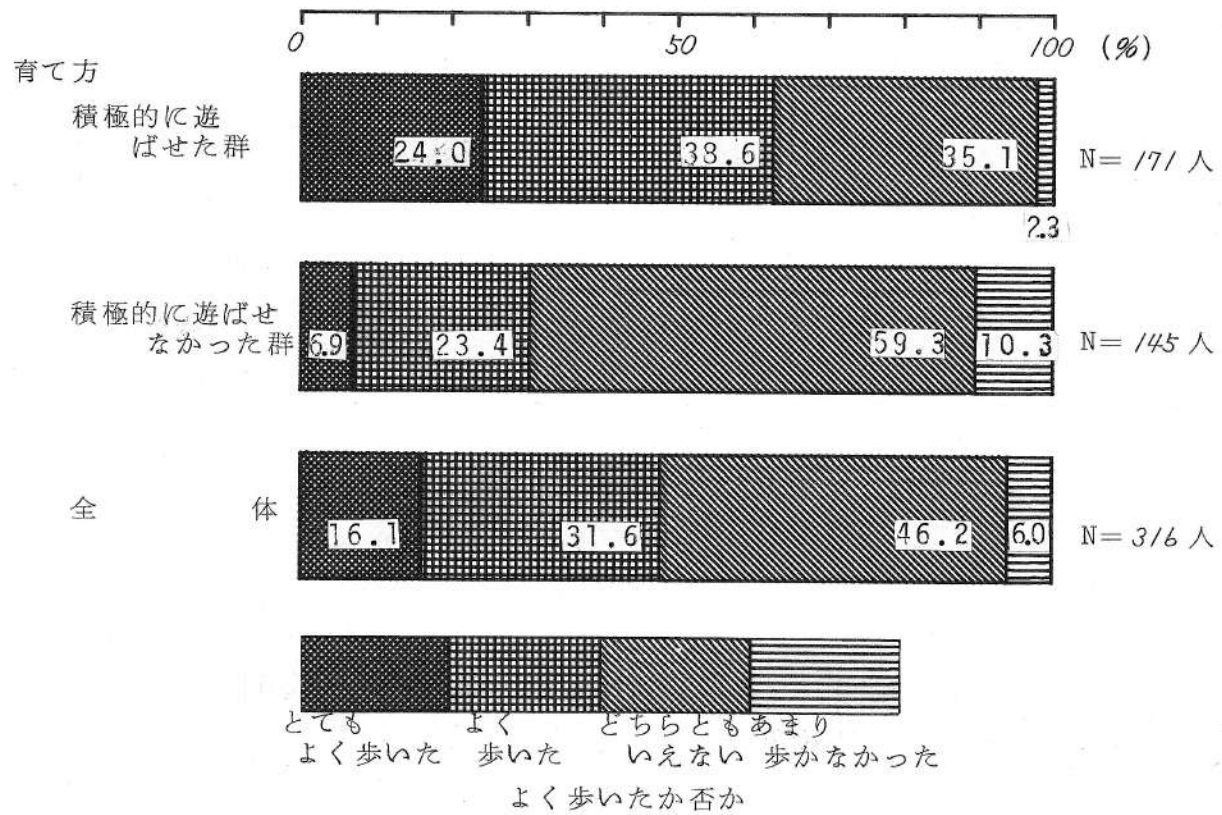


図-33　子どもを戸外で遊ばせる育て方と子どもと外出した時よく歩いたか否か

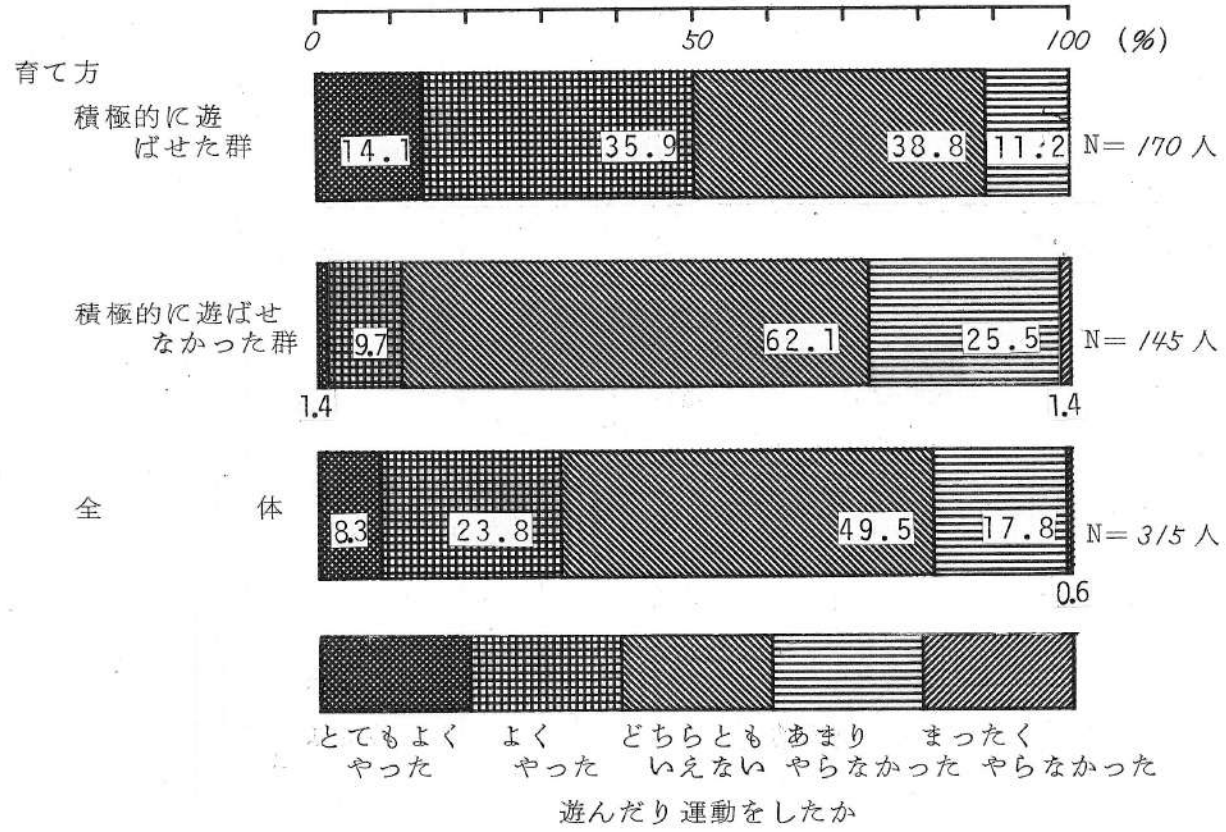


図-34　子どもを戸外で遊ばせる育て方と子どもといっしょに遊んだり運動をしたか

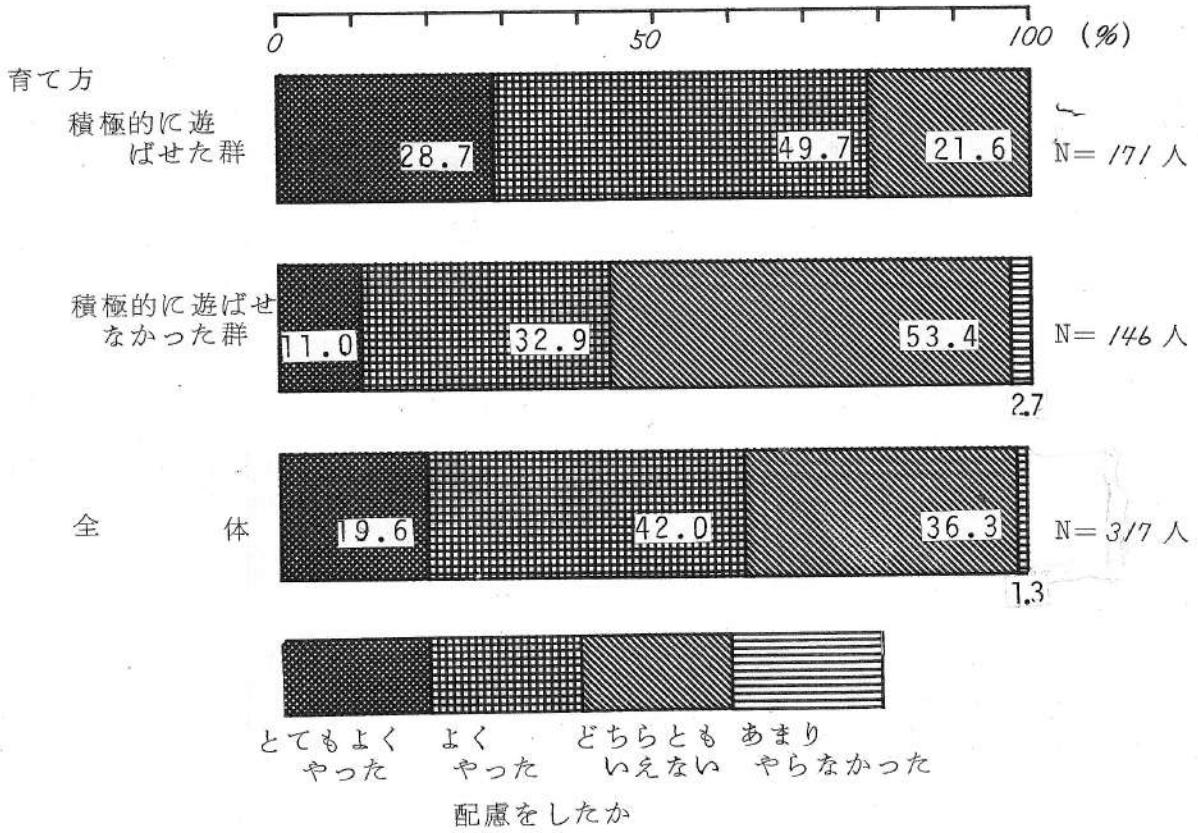


図-35 子どもを戸外で遊ばせる育て方と子どもが遊びや運動しやすいような配慮をしたか

また、「子どもを戸外で遊ばせる」ことに積極的であった群は、図-36に示したとおり「子どもがよごれて帰って来た時」に「しかった」とするものが、消極的な群に比べ有意に少なかった（P<0.001）

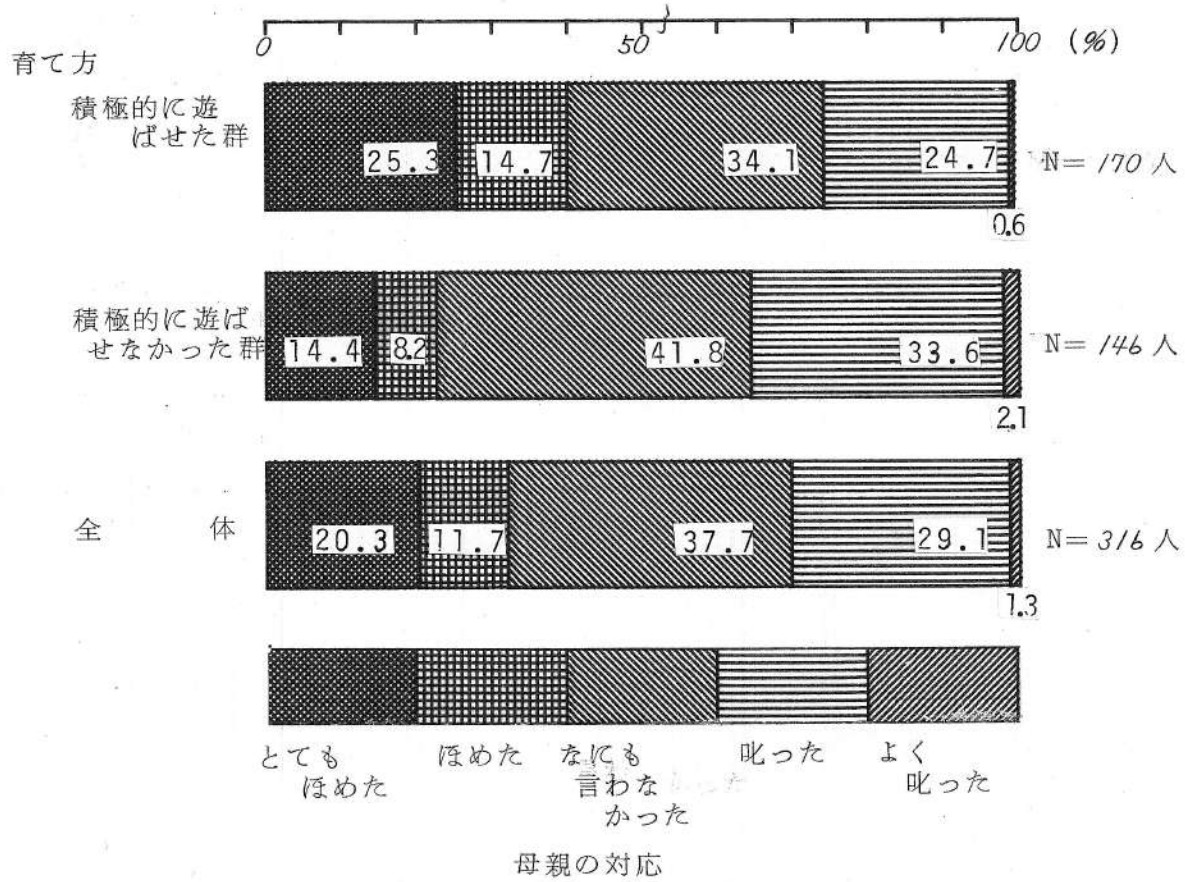
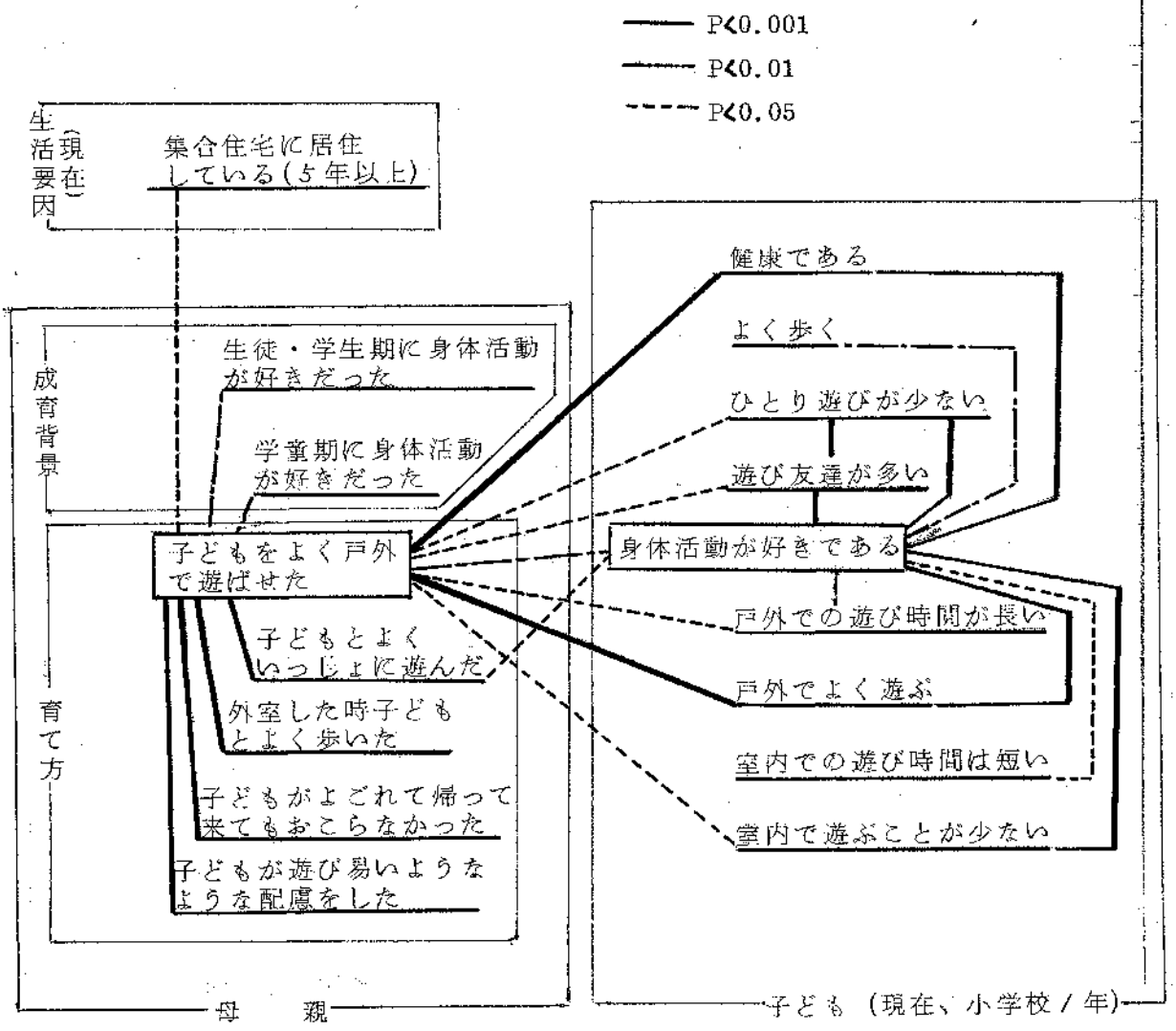


図-36　子どもを戸外で遊ばせる育て方と子どもがよごして帰った時の母親の対応

これまで述べてきた，母親の育て方と子どもの身体活動との関連をまとめたものが図-37である。



図－37　母親の育て方と子どもの身体活動との関連

第6章　考察

第1節　子どもの身体活動を好む・好まないという意識と身体活動の現状

子どもが身体活動を好むかどうかに関する意識と身体活動の現状，および健康状態との関連について検討した。その結果，身体活動を好む子どもは，好まない子どもに比べて，遊び場を戸外に求めることが多く，遊ぶ時間も長かった。また，これらの子どもには，遊び友達も多く，したがって，ひとり遊びが少なかった。運動嫌いの子どもは，内向性の性格が多く，どうしても戸外で遊ぶ頻度が少なくなり，友達も少ないという仲田[31]や佐々本[38]の報告があるが，この報告を運動好きの子どもの側におきかえてみると，戸外でよく遊び，友達も多いということになり，今回の結果と一致することが考察された。そして，子どもが身体活動を好むとか，好まないという意識

と，遊び友達，遊び場は相互に関連し合っていると考察された。しかも，一つの遊びを戸外で，また多人数で行なうと，室内で，また少人数で行なうよりも当然のことながら，活動量が多くなる[14]ということを考慮すると，多くの友達と戸外で遊ばせるような方向に向けさせることが，身体活動を好む方向へ持っていくことになると推察された。

次に，身体活動を好む子どもは，健康状態も良好である傾向が見出された。このことは，前述の身体活動を好む子どもは，戸外での遊びの量が多くなることを考慮すれば，高野[44]らの戸外遊びの少ない幼児には，咳嗽，喘鳴，発熱，腹痛，下肢痛といった所見が多いという報告や，廣嶋[8]の戸外遊び時間の長い子どもは，健康状態が良いという報告と一致しているといえよう。

戸外で十分に遊ぶことは，野原[32]ら，高城[42]らが報告しているように，食事をしっかりと集中的に食べ，睡眠も十分に取るようになる。

すなわち，規則正しい生活を営む習慣づくりにつながると考えられる。また，戸外での遊びは，室内での遊びに比べて運動量が多くなることから消費エネルギーも多くなり，摂取エネルギーを十分に発散させ，肥満予防にもつながる。[29] そのほかに骨の生成を促がし，運動刺激を与え，骨の緻密性の発達に関与し，骨の健康な発育に影響を与える[4]など数々の利点が考えられる。

戸外で多くの友達と遊び，身体活動を好む子どもが健康であることは，当然上述のように理論的にも裏付けられることであるが，この戸外での遊び時間，友達の数，身体活動を好む・好まないという意識，および健康状態の4つは，相互に関連し合い，相乗効果を挙げていることが推測されよう。

第2節　子どもの身体活動を好む・好まないという意識と母親の就学までの育て方

身体活動を好む・好まないという意識はど

のようなことから分かれて来るのだろうか。この分岐につながる要因は，小学校高学年以上の児童，生徒を対象に「運動嫌い」の原因究明を行なった佐久本ら[37][38]，波多野ら[6]により，素質的なもの，経験的なものなどいくつかに分類されている。その中では，乳幼児期における身体活動の経験も大きな比重を占めているとしている。乳幼児の生活は，主な養育者である母親の影響を強く受けることは当然であり，身体活動に関しても，母親の意識・態度によって経験の度合が変わってくると考えられる。そこで，乳幼児期に，もし，母親が子どもの身体活動を助長すると考えられる方向で育児を実行したとすれば，その子どもが小学校1年の段階で，身体活動を好む・好まないといった意識にどのような影響を受けているのであろうか。この関係を少しでも実証するために，乳幼児期の子どもの身体活動を助長すると考えられる母親の乳幼児期での育て方のうちから6項目を設定し，それぞれの

実施の程度とその子どもが小学校1年になった段階での身体活動を好む・好まないという意識および戸外での遊び時間について，検討を試みた。その結果，6項目のうち少なくとも，乳幼児期に「子どもを戸外で遊ばせる」育て方は，子どもに身体活動を好むようにさせ，戸外で遊ぶ時間を多くする効果があるのではないかと考えられた。

一般に子どもの発育・発達に母親の育児態度が影響を及ぼすことは明らかである。特に子どもが乳幼児期の母親の育児態度は，性格形成[10)34)]や精神発達[2)46)51)]に大きく影響するといわれている。しかし，子どもの身体活動を好む・好まないという意識に関して，母親の態度が影響を及ぼすことを明らかにした文献は見当らない。そこで，このことを解明するため，ここでは，身体活動に対する意識ではなく，運動能力についての文献より，母親の態度の位置づけについて考察してみた。

「大山[36]は，運動への意識は，運動能力との関

連が強く，運動を好むものは，運動能力が高いとしており，また，佐久本[38]，波多野[6]，仲田[31]は，運動嫌いなものは，運動能力が低い傾向にあると報告している。

運動能力の発達に関して，津守ら[46]，松田ら[19]および本間[9]は，育児態度の影響はないとしている。その反面，上田ら[50]，松永ら[23]の報告では影響があるとしている。この両極端の見解は，運動能力に対する育児態度の影響力が，子どもの素質，母親の考え方，生活背景などさまざまな要因によって左右されるためではないかと考えられる。このことに関して，体育科学センターのグループは，一連の研究[1][6][24][26][28]を実施し[39][40]，幼児の運動能力発達に及ぼす生活条件の分析を試みた。それによると，運動能力の発達に及ぼす生活条件は，個々の影響力はさほど大きいものではないが，そこで単独で働きかけると考えるよりは，相互に関連しあいながら関与するのではないかという示唆を得た。これを受けて松浦[25]は，生活条件について相関

分析により検討した。その結果，暦年齢，両親の有無，歩行開始月齢，食事量，休日における家族とのレクリエーションなど23項目で幼児の運動能力の60％以上を説明できるとした。

前述の文献より，身体活動を好む・好まないという意識が，運動能力と関係があるとみるならば，母親の育児態度は，他の生活条件との相互関係を保ちつつ，やはり子どもの身体活動に影響を与えていると考えるべきであろう。

このことは，子どもの身体活動を促進または，抑制する条件として，個人の力ではどうにもならない，自然的，社会的環境条件の他に個人の力で改善できるもののひとつとして母親の育児態度，たとえば，身体活動を好む意識を戸外で遊ばせる育て方を通して，子どもに植え付けるといったことが大切ではないかということを示唆していよう。

第3節　子どもの身体活動を好む・好まないという意識と生活条件

子どもの身体活動を好む・好まないという意識や戸外での遊び時間に影響を及ぼすのではないかと考えられる要因のいくつかについて検討した。しかし，本研究で取り挙げた住居の広さ，住んでいる階数，兄弟の有無，テレビ視聴時間については，関連がみられなかった。これは，前述のとおり，ある生活条件が単独では身体活動への影響力は少なく，他の条件と相互に関連し合いながら影響を及ぼすためであろう。

第4節　「子どもを戸外で遊ばせる」育て方を促進した要因

乳幼児期に「子どもを外で遊ばせる」育て方は，子どもが将来身体活動を好む方向で少なからず好影響を与える。そこで，この育て方は，どのような要因によって促進されたのかを検討した。

これによれば，まず，「子どもを外で遊ばせる」育て方を実行した母親は，子どもの身体活動を助長すると考えられる育て方，すなわち「子どもといっしょに遊んだ」「子どもと外出した時歩いた」「子どもが遊び易いような服装，くつなどの配慮をした」「子どもがよごれて帰って来ても怒らなかった」といったことも積極的に実施している傾向がみられた。これらの育て方は，母親が子どもを戸外で遊ばせることを効果的なものにする条件であると考えられる。すなわち，よごれて帰って来ても怒らなかったり，遊び易い服装をさせたりする背景の中で，子どもは思いきって戸外で遊べるであろうし，また，母親が子どもと身体活動を伴なう遊びをいっしょにしたり，外出した時いっしょによく歩けば，子どもは身体活動の経験を自然と積むことになろう。そういった状況に子どもを置いておけば，子どもだけを戸外に出した場合でも，嫌がることなく，身体活動をするのではなかろ

うか。

野原[32]らは，むし歯予防のためには，規則正しい食生活を中心とした生活のリズムづくりと，予防に効果的と考えられる日常生活面での工夫を多角的に行なうことが，ひいては健全な成長発達に役立つことになると報告している。この一環に，戸外での身体活動を助長させることが入っているが，子どもの身体活動を促進するためには，子どもの日常生活面での意図された工夫が多角的に実施され続けることが必要であろう。

次に母親側の条件として，母親自身が学童期または，生徒・学生期に身体活動が好きであった母親の方が，そうでない母親に比べて自分の子どもを戸外で遊ばせていた。これについては，母親自身が受けた養育態度は，子どもにくり返す傾向があるとした上田[49][50]ら，高橋[43]らの報告があるが，もし，母親が幼児期に戸外で親から制限を受けず，満足いくように遊び，そして身体活動を好むようになってい

れば，その母親は，自分の子どもにも同じようにして，戸外で遊ばせるであろうと考察された。

生活条件として，現在まで5年以上同じ住居に住み続けているものについて，住居の違いによる差を検討した。5年と限定した理由は，現在，小学校1年の子どもは，当然6～7才であり，ある程度身体活動の発達が進み，行動範囲が広がる2才以降，現在までの少なくとも5年間は，同じ住居に住み続けていなければ，住居の違いによる母親の育て方に差は見出されないだろうと考えたからである。

その結果，集合住宅居住者の方が，一戸建住宅居住者よりも戸外で遊ばせる育て方を実施していた傾向がみられた。このことは，両者の部屋数を比較すると，一戸建住宅5.10部屋，集合住宅3.46部屋であり，一戸建住宅の方がいく分広くなっており，子どもの遊び空間は，自宅室内にも確保できよう。さらに，室内は母親の視野の中にあるわけで，安全面

で母親にとって安心できると考えられる。一方，集合住宅では，室内が狭い傾向にあるわけで，どうしても広い空間に出たい欲求が高くなるのではないかと推測された。

他の要因，例えば，母親の幼児期の居住地域や母親の同胞の人数，健康状態などは「子どもを戸外で遊ばせた」育て方と関連があるのではないかと考え，検討したが，これを裏付ける結果は得られなかった。

第7章 結論

本研究における結果と考察から次のような結論を得た。

1) 身体活動を好む子どもは、好まない子どもに比べて、戸外に主な遊び場を求め、遊ぶ時間が長い傾向にある。また、遊び友達の数も多かった。

2) 身体活動を好む子どもは、好まない子どもに比べて、健康状態が良好であった。

3) このことから、身体活動を好む意識、戸外での遊び時間、遊び友達、健康状態の4つの要因は相互に関連し合い、相乗効果を挙げていることが推測された。

4) 就学まで、母親が戸外で遊ばせるように意図して育てた子どもは、小学校1年の段階で、身体活動を好み、戸外での遊び時間が長いことがわかった。このことから、乳幼児期にできる限り戸外で遊ばせ、より多

くの身体活動の体験を積ませておくことが重要であると考えられた。

5) 育て方として，積極的に子どもを戸外で遊ばせた母親は，「子どもといっしょに遊んだ」「子どもと外出した時歩いた」「子どもが遊び易いような服装・くつなどの配慮をした」「子どもがよごれて帰って来ても怒らなかった」といった身体活動を助長すると考えられる育て方を積極的に実施していた。このことより，日常生活の中で身体活動を意図した多角的な育て方が，その子どもにとって後の身体活動に，より望ましいことと推測された。

6) 母親の成育過程で，身体活動を好んできた者は，そうでない母親と比べて，子どもをより積極的に戸外で遊ばせていたことがうかがえた。このことから，自らが身体活動を好めば，自分の子どもも積極的に戸外で遊ばせるであろうと推測された。

7) 一戸建住宅に住んでいる母親に比べ，集

合住宅に住んでいる母親の方が，育児の中で子どもを戸外で遊ばせる傾向がみられた。

8) 今後は，身体活動を意図した育て方をとり入れた場合の効果を追跡すると共に，他の生活条件との関連を分析していきたい。

第8章　要約

子どもの身体活動について種々の観点から数多くの研究がなされている。しかし乳幼児の育児の中で，身体活動に対しての意識をもち，それが何らかの形で態度にあらわされたことが，その後の子どもの身体活動にいかなる影響を与えるかということについて検討された研究は，あまり見出されない。

本研究では，乳幼児期の子どもに，母親が身体活動を助長すると考えられる育て方を実行してきた場合に，その子どもが，小学校1年の段階で身体活動にいかなる意識を持つかという点について検討した。対象は，東京と千葉の小学校1年生を持つ母親361人とその担任14人である。母親には本人の成育環境，子どもの乳幼児期の育て方，子どもが身体活動を好む・好まないという意識についての評価などについてアンケート調査をし，また，

担任教師には，子どもが身体活動を好む・好まないについて評価してもらった。

その結果，次のような結論を得た。

1)身体活動を好む子どもは，好まない子どもに比べて，戸外に主な遊び場を求め，遊ぶ時間が長い傾向にある。また遊び友達も多い。さらに，2)健康状態も良好であった。3)このことから，身体活動を好む意識，戸外での遊び時間，遊び友達，健康状態の4要因は相互に関連し合い，相乗効果を挙げていることが推測された。4)就学まで，母親が戸外で遊ばせるように意図して育てた子どもは，小学校1年の段階で，身体活動を好み，戸外での遊び時間が長いことがわかった。このことから，乳幼児期にできる限り戸外で遊ばせ，より多くの身体活動の体験を積ませておくことが，重要であると考えられた。5)育て方として，積極的に子どもを戸外で遊ばせた母親は，「子どもといっしょに遊んだ」「子どもと外出した時歩いた」「子どもが遊び易いような服

装・くつなどの配慮をした」「子どもがよごれて帰ってきても怒らなかった」といった身体活動を助長すると考えられる育て方を積極的に実施していた。このことより，日常生活の中で身体活動を意図した多角的な育て方が，その子どもにとって後の身体活動により望ましいことが推測された。6)母親の成育過程で，身体活動を好んできた者は，そうでない母親と比べて，子どもをより積極的に戸外で遊ばせていたことがうかがえた。このことから，自らが身体活動を好めば，自分の子どもも積極的に戸外で遊ばせるであろうと推測された。7)一戸建住宅に住んでいる母親に比べ，集合住宅に住んでいる母親の方が，育児の中で子どもを戸外で遊ばせる傾向がみられた。8)今後は，身体活動を意図した育て方をとり入れた場合の効果を追跡すると共に，他の生活条件との関連を分析していきたい。

謝辞

本論文の完成まで終始一貫温かく見守って頂だいた順天堂大学健康管理学渋谷修教授、ならびに審査員として御指導と御鞭撻を賜った環境衛生学山本武彦教授、体力学栗本閲夫教授、および絶え間なき御指導を賜った指導教員の健康管理学野原三洋子助教授、また同じく健康管理学土屋基講師に衷心より感謝の意を表します。

特に、本研究のアンケート調査を心よく引き受けて頂だいた各小学校の皆様方、また資料作成に協力して頂だいた健康管理学・健康障害論ゼミナール員一同の方々に対し深く謝意を表するものであります。

文献

1) 浅見高明，渋川侃二，多田繁：調整力に関する研究(5)－調整力と体質との関連について．体育科学、7 148－153 (1979)

2) 東　洋，柏木恵子，R.D. Hess：母親の態度・行動と子どもの知的発達　日米比較研究第1版．307，東京大学出版会：東京(1981)

3) Bailey, D.A.: "The Growing Child and the Need for Physical Activity", Child in Sport and Physical Activity. ed. J.G. Albinson, and G.M. Andrew, 1 sted. 81－91, Univ. Park Press: New York (1976)

4) 船川幡夫：最近みられる学童の骨折とその背景．学校保健研究，21 (10) 472－475 (1979)

5) 長谷川常次郎，中林久二，大野武治，関四郎，横井真雄，羽鳥好夫：体育の立場からみ子どもの発達に関する累積的研究（第1報）．東京学芸大学紀要，第5部門，20．128－155 (1969)

6) 波多野義郎，中村精男：「運動きらい」の生成機序に関する事例研究．体育学研究、26 (3) 177－187 (1981)

7) 樋口　満：発育発達と運動・休養・栄養．体育の科学，32 (1) 33－39 (1982)

8) 広島清志：幼児の戸外遊び環境と健康度に関する調査研究．人口問題研究所年報，

9) 本間純子：幼児の運動能力に影響を及ぼす要因に関する研究－特に運動遊びについて．－日本体育大学紀要第7号 125－136 (1978)

10) 石黒大義，藤原善悦：しつけ態度の型に対する親の評価．教育心理，1 (9) 532－537

(1953)

11) 石橋　保，佐久本　稔："運動ぎらい"に関する研究(第2報)－運動きらいを規定する年齢別要因について－．福岡教育大学紀要第5分冊．**23**．27－36(1973)

12) 井上健治：子どもの生活時間と遊び．東京大学教育学部紀要、**13**．1－30(1973)

13) 嘉戸　脩：スポーツ活動の多元クロス分析の試み．東京学芸大学紀要第5部門，**28** 214－223(1976)

14) 加賀谷淳子：乳幼児の運動活動と体力．体育の科学，**25**(8) 530－536(1975)

15) 倉島武徳：幼児の体力とその生活環境に関する一考察，体育学研究，**15**(5) 44(1970

16) 栗本閲夫，吉儀　宏，岩波　力：調整力"上位群"と"下位群"に組分けられた幼児の比較．体育科学，**7**．106－114(1979)

17) 正木健雄，阿部茂明：日本の子ども・青年のからだ調査－「乳幼児のからだ」アンケート報告書－日本体育大学体育研究所々報，**6**．1－24(1981)

18) 松田岩男：幼児の遊びと運動能力．－遊びの時間や人数との関連で－．体育の科学，**20**(8) 484－487(1970)

19) 松田岩男，杉原　隆，南　貞己，和田　尚：幼児の運動能力と居住地区，遊び，母親の養育態度との関係について．東京教育大学体育学部紀要，**10**．41－47(1971)

20) 松島富之助，小林治夫，羽室俊子，宮地文子，三沢貞子，湯浅玖子，吉本彌生：幼児の運動機能に及ぼす諸要因の分析の研究．日本総合愛育研究所紀要，第1集39－63(1965)

21) 松島富之助：幼児の保健指導．監修．松村龍雄，乳幼児保健．第3版．276，医学書

院：東京(1974)

22) 松永恵子：幼児の運動能力に関する一考察－性格との関係－．体育学研究，**13** (5) 195 (1968)

23) 松永恵子：幼児の運動能力その背景となるもの．長崎県立短期大学長崎女子部研究紀要 **15**．122－150 (1968)

24) 松浦義行，高田典衛，森下はるみ，吉川和利：幼児の調整力と生活環境条件との関連 体育科学，**6**．164－172 (1978)

25) Matsuura Y. : The Correlational Analysis of Living Conditions with Motor Performance Ability in Children. Rep. Res. Cent. Rhys. Ed. **8**．95－107 (1980)

26) 松浦義行：幼児における諸生活活動の調整力発達への関連．体育科学，**9**．190－194 (1981)

27) 宮田英子，米田幸雄：歩行開始に関する研究，小児保健研究，**31** (5) 235－239 (1973)

28) 森下はるみ：幼児期の運動能力の発達におよぼす内的外的要因の影響．体育科学，**7**．154－163 (1979)

29) 村田光範：小児肥満．公衆衛生，**46** (8) 549－558 (1982)

30) 永井秀夫：5歳クラス児の体力調査．小児保健研究，**31** (3) 84－88 (1972)

31) 仲田千恵子，頭川徹治，横山泰行：運動ぎらいの子どもたちの特徴は何か．新体育，**48** (2) 158－159 (1978)

32) Nohara M., M. Tsuchiya, F. Tsubura, K. Ishii, : A Health Education Program for

the Prevention of Dental Caries of Preschool Children ; Human Ecology and Race Hygiene, **47** (2) 62 − 73 (1981)

33) 野原三洋子：未発表資料

34) 大西誠一郎，石黒大義，大橋正夫，旭　妙子：家族関係と人格形成－家族関係と幼児の人格（第3報告）－．名古屋大学教育学部紀要，**3**．134 − 141 (1957)

35) 大山良徳：幼児の身体発育に対する主要因の選定に関する基礎的研究（第1報）．体育学研究，**19** (2) 87 − 98 (1974)

36) 大山良徳：都市化が児童の体格・体力に及ぼす影響．学校保健研究，**21** (10) 464 (1979)

37) 佐久本　稔：身体活動に対する興味を探る－"運動ぎらい"の要因・寄与率と行動傾性からの考察－．日本体育学会27回大会号，592 (1976)

38) 佐久本　稔，篠崎俊子：学校体育期の"運動嫌い"に関する研究(I)．生活科学，**12** (1) 55 − 78 (1979)

39) 末利　博，千駄忠至：幼児における運動の調整力の発達に寄与する要因に関する研究．体育科学，**7**．115 − 121 (1979)

40) 高田典衛，松浦義行，近藤充夫，森下はるみ，吉川和利：幼児期における調整力の生活との関連からみた構造と発達．体育科学，**5**．162 − 182 (1977)

41) 高城義太郎・斉藤歓能，小山一宏，小林芳文：幼児のpositiv healthの開発に関する研究第1報．児童研究 54 (1) 28 − 47 (1975)

小林芳文：子どもの遊び　第1版．47 − 50，光生館：東京(1977) より引用

42) 高城義太郎・斉藤歓能,小山一宏,小林芳文：幼児のpositiv healthの開発に関する研究第2報．児童研究 55 (1) 29 − 52 (1976)

林芳文を子どもの遊び　第1版 172 − 175,光生館：東京(1977) より引用

43) 高種種昭：母親の生活史と育児態度に関する研究一(I) 原家族における親子関係一．日本総合愛育研究所紀要．第1集 127 − 147 (1965)

44) 高野　陽,小林芳文,小山一宏,斉藤歓能,高城義太郎：わが国の幼児体力の実態に関する研究．小児保健研究, **37** (6) 453 − 457 (1979)

45) 戸村博之：児童の運動能力と心理的特性に関する研究．体育学研究, 23 (2) 173 − 181 (1978)

46) 津守　真,稲毛教子：乳児の精神発達に及ぼす育児態度の影響．教育心理学研究, **5** (4) 14 − 24 (1958)

47) 土屋　基,野原三洋子,石井欣一,粒良フミ：乳歯のう　予防に関する研究(母親への働きかけ) 第9報,民族衛生, **46** 付録. 51 − 52 (1980)

48) 土屋　基,野原三洋子,石井欣一,粒良フミ：乳歯のう　予防に関する研究(母親への働きかけ) 第11報,民族衛生, **48** 付録. 72 − 73 (1982)

49) 上田礼子,小沢道子：母親の理想像について一2才児をもつ母親を中心として一．母性衛生, **14** (2) 31 − 35 (1973)

50) 上田礼子,小沢道子：養育行動と養育者自身の育てられた　との関係について．母性衛生, **16** (1) 91 − 95 (1975)

51) 上田礼子,渡辺美恵子：乳幼児期における発達の縦断的研究(2)．小児保健研究,

33 (5) 207 (1975)

52) 山岡誠一：子どもの肥満と健康生活．学校保健研究，**22** (6) 286 — 289 (1980)

53) 山下俊郎：幼児心理学．第2版．289，朝倉書店：東京(1971)

54) 安田三郎：社会調査ハンドブック　新版，第1版．188，有　閣：東京(1969)

A STUDY ON CONSCIOUSNESS AND ATTITUDE OF MOTHERS IN CHILDCARE AS RELATED TO HEALTHFUL LIVING OF CHILDREN - WITH SPECIAL REFERENCES TO PHYSICAL ACTIVITIES -

Nobuzumi SHIMIZU

SUMMARY

Although there are considerable number of papers which have examined physical activities of children from various points of view, it is difficult to find any papers which have reported on consciousness and attitude of mothers intended to encourage physical activities in the process of their childcare. The author supposed that if consciousness and attitude of mothers had intended to encourage physical activities in the early period of their children's lives, these children would get into the habit of active participation in physical activities in their future lives. This paper is an attempt to explore these relationships.

Questionnaire survey were conducted in three primary schools in Tokyo and Chiba prefecture. The subjects were 361 mothers whose children were enrolled in the 1st grade of the primary schools and the classroom teachers of these children.

The results were as follows:

1) The children who liked physical activities chose mainly outdoors as their playarea and were at play longer than the children who didn't like physical activities. Those who liked physical activities had more friends than those who didn't like such activities.

2) Children who liked physical activities were rated higher in their health status than those who didn't like them.

3) It was guessed that like-dislike of physical activities, total time of outdoor play, number of friends play with and health status are related with each other and exerting integrated effects.

4) It was observed that the 1st grade children encouraged to play in the open air in their infant period by their mothers, had a tendency to like physical activities and were engaging longer period of time in outdoor play than those who had not given such encouragement by their mothers. From these results, it was felt important for the infants that their mothers bring them out into the open air frequently.

5) The mothers who had positively brought their infants out into the open air more frequently , had practiced certain methods of upbringing which considered enhance the inclination for physical activities. These methods include; had played with their infants; had walked along with their infant often when they had gone out; had chosen clothes and shoes for their infants which made play easier; and had made no complains to their children when they had soiled these clothes and shoes.

6) It was observed the tendency that the mothers who had liked physical activities themselves in their childhood and youth, brought their infants out into the open air more frequently, than the mothers who had not liked physical activities themselves.

7) Mothers living in the apartment complex brought their infant out into the open air more frequently than those who living in houses of their own.

8) Further studies are needed to examine the effect of childcare to bring up the inclination for physical activities on the longitudinal observation considering other factors of living condition.

資料－1　母親用アンケート用紙

子どもの健康づくりに関する
アンケート

記入年月日

昭和57年7月　日

記入者
記入される方に○印を付けて下さい
母　父　その他(　　)

A　あなたご自身のことについておたずねします。

1 現在あなたはテニス、バレーボール、ジョギング(走る)、水泳、体操、ヨガなど、何かスポーツを定期的に行なっていますか。

1　はい	2　いいえ

→SQ　それらを行なう時間を合計すると一ケ月でどのくらいになりますか。あてはまるものに○印を付けて下さい。

一時間以下	2時間	3時間	4時間以上	わからない

2 日頃の生活の中で「からだを動かす」ということについて、あなたは次のようなことを心がけていますか。いる項目に○印を付けて下さい。(いくつでもけっこうです。)

1　近い所はなるべく歩く。→ SQ　いつも歩くのは片道何分または何Kmくらいですか。
片道［　　］分または［　　］Km

2　早足で歩く。

3　エレベーターやエスカレーターを使わずになるべく階段を使う。

4　車、バス、電車などの代りに自転車を使う。

5　ショッピングカーなどを使わずに荷物は多少重くても手で持つ。

6　家事はなんでもていねいに力を入れてやる。

7　一日分の家事はできるだけ取りまとめて一気にやってしまう。

8　その他(具体的に：　　)

9　特に心がけているようなことはない。

3 あなたの小さい時から現在までのことについておたずねします。

(1)あなたはご兄弟姉妹の何人中の何番目ですか。

［　　］人中［　　］番目

以下の設問の回答はあてはまるものに○印を付けて下さい。

(2)子どもの頃は戸外でからだを動かす遊びをすることが好きでしたか。

とても好きだった	好きだった	どちらでもない	嫌いだった	とても嫌いだった	わからない

(3)学生時代(中学生以上)は運動、スポーツなどをしてからだを動かすことが好きでしたか。

とても好きだった	好きだった	どちらでもない	嫌いだった	とても嫌いだった	わからない

(4)社会人になつて現在まで運動、スポーツ(ハイキング、登山なども含む)などをしてからだを動かすことが好きでしたか。

とても好きだった	好きだった	どちらでもない	嫌いだった	とても嫌いだった	わからない

(5)子どもの頃からだは丈夫でしたか。

とても丈夫だった	丈夫な方だった	普通だった	あまり丈夫でなかった	病気がちであった	わからない

(6)学生時代(中学生以上)からだは丈夫でしたか。

とても丈夫だった	丈夫な方だった	普通だった	あまり丈夫でなかった	病気がちであった	わからない

(7)社会人になって現在までからだは丈夫でしたか。

とても丈夫だった	丈夫な方だった	普通だった	あまり丈夫でなかった	病気がちであった	わからない

(8)これまで運動、スポーツ、遊びなどをしている時に軽いケガを除いてケガをしたことがありますか。

一ケ月以上の大ケガをした	二週間くらいのケガをした	一週間くらいのケガをした	ほとんどケガをしたことがない	まったくケガをしたことがない	わからない

4 あなたはこれまでお子さん(小学一年生)の育児を通じて次のようなことを心がけて来ましたか。あてはまるものに○印を付けて下さい。

(1)子どもを戸外で遊ばせましたか。

とてもよくやった	よくやった	普通にやった	あまりやらなかった	まったくやらなかった	わからない

(2)子どもと外出した時歩きましたか。

とてもよくやった	よくやった	普通にやった	あまりやらなかった	まったくやらなかった	わからない

(3)子どもと遊んだり、運動しましたか。

とてもよくやった	よくやった	普通にやった	あまりやらなかった	まったくやらなかった	わからない

(4)子どもが遊びや運動をしやすいような配慮(動きやすいものやよごれても洗たくしやすいものを着せるなど)をしましたか。

とてもよくやった	よくやった	普通にやった	あまりやらなかった	まったくやらなかった	わからない

(5)子どもがよごれて帰ってきたときどうしましたか。

よく遊んだとほめた	ほめた	なにもいわなかった	少しはしかった	しかった	わからない

(6)子どもが遊びや運動で軽いケガ(すり傷くらい)をした時どうしましたか。

まったく注意を与えなかった	あまり注意を与えなかった	注意を与えた	きびしく注意を与えた	わからない

B　あなたのお子さん(小学一年生)についておたずねします。

5 あなたのお子さんの日頃のことについておたずねします。

(1)お宅の近くには子どもが安心して遊べる場所がありますか。

十分にある	ある	どちらともいえないがある	あまりない	まったくない	わからない

(2)あなたのお子さんには遊び友達がどのくらいいますか。

多くいる	いる	どちらともいえないがいる	あまりいない	まったくいない	わからない

(3)お子さんは戸外で遊んだり、運動することが多いですか。

とても多い	多い	どちらともいえないがする	少ない	とても少ない	わからない

(4)お子さんはからだを動かす遊びや運動を好みますか。

とても好む	好む	どちらともいえないがやる	好まない	まったく好まない	わからない

(5)お子さんはよく歩きますか。

とてもよく歩く	よく歩く	どちらともいえないが歩く	あまり歩かない	まったく歩かない	わからない

(6)お子さんは同じ年齢の子どもと比べて丈夫ですか。

とても丈夫	丈夫な方	普通	あまり丈夫でない	病気がちである	わからない

(7)これまでお子さんは運動、スポーツ、遊びなどをしている時に軽いケガを除いてケガをしたことがありますか。

一ケ月以上のケガをしたことがある	二週間くらいのケガをしたことがある	一週間くらいのケガをしたことがある	ほとんどケガをしたことがない	ケガをしたことがない
わからない				

6 日頃お子さんがよくする遊びは何ですか。下からよくする順に三つ選んで□の中に記号を入れて下さい。

1 □
2 □
3 □

a鬼ごっこ　bボールなげ(野球も含む)　cサッカー　dなわとび
eゴムとび　f自転車のり　g鉄棒　hかけっこ　iイシケリ
jゲーム(ホームゲーム・テレビゲーム・トランプなど)
kままごと　l人形遊び　m絵かき　nマンガを読む　o怪獣ごっこ
p超合金合体ごっこ　qミニカーごっこ
rその他(具体的にお書き下さい：　　)
sわからない

7 日頃お子さんがよく遊ぶ相手はだれですか。下からよく遊ぶ順に三人選んで□の中に記号を入れて下さい。

1 □
2 □
3 □

a ひとり　b クラスの友達　c 近所の年上の友達
d 近所の同年の友達　e 近所の年下の友達　f 兄　g 弟
h 姉　i 妹　j母　k 父　l 祖母　m 祖父　n 近所の大人
o その他(具体的に　　)
p わからない

8 日頃お子さんはどこでよく遊びますか。下からよく遊ぶ順に三つ選んで□の中に記号を入れて下さい。

1 □
2 □
3 □

a 自宅の屋内　b 自宅の庭
c 友人宅の屋内　e 友人宅の庭
d 学校の校庭　f 幼稚園、保育園の園庭
g 空地(団地・マンションなどの空地、材木置場なども含む)
h 公園(児童公園も含む)　i 宅地の造成地
j 雑木林　k 田畑
l 神社、寺の境内　m 児童館、コミュニテイセンター
n 団地、マンションなどの廊下・階段・屋上
o 駐車場　p 自動車が通らない道路
q 自動車があまり通らない道路
r 自動車のよく通る道路
s その他(具体的に　　)
t わからない

9 現在お子さんは「ならいごと・けいこごと」に通っていますか。通っていましたら下の表の例にならってご記入下さい。

種　類	一ケ月の回数	一回の時間	始めてどれくらい
(例)　ピアノ	4回	1時間	3年2ケ月
(例)　英語塾	8回	1.5時間	3ケ月
(例)スイミング	8回	2時間	2年

10ここ一週間の間で土曜、日曜を除いた晴れた日のお子さんの生活について下の表へ例にならってご記入下さい。

	午前6	7	8	9	10	11	12	午後1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
(例) 戸外で遊ぶ								←→									
睡眠(昼寝も含む)																	
学校																	
テレビを見る																	
勉強																	
室内で遊ぶ																	
戸外で遊ぶ																	
本を読む(マンガも含む)																	
洗面、入浴便所																	
食事																	
その他( )																	

C　あなたのお住いやご家族のことについておたずねします。

11 あなたのお住いについておたずねします。

(1)現在あなたはどのような種類の住宅にお住いですか。

1 一戸建住宅(借家も含む)
2 集合住宅(アパート、マンション、社宅、公団住宅など)
3 その他(具体的に：　　)

→ SQ　何階にお住いですか　[　　]階

→ SQ　エレベーターやエスカレーターはありますか

1 ある　　2 ない

(2)部屋数はいくつですか。(フロ、トイレ、洗面所は除く)　[　　]部屋

合計するとたたみ何畳分ですか。　[　　]畳分

(3)その住宅に何年くらいお住いですか。　[　　]年

12 現在あなたの住んでいる町(町会、自治会など) はどのような所ですか。あてはまるものに○印を付けて下さい。

1　住宅がほとんどである
2　団地がほとんどである
3　住宅地ではあるが商店(材木屋も含む)や町工場もある
4　商店がほとんどである
5　町工場がほとんどである
6　住宅地ではあるが田畑もある
7　田畑がほとんどである
8　その他(具体的に：　　)

13 あなたは小学校卒業までどのようなところにお住いでしたか。質問 12 からあてはまる番号を選んで □ の中に入れて下さい。

□

その他の方は(　)内に具体的にお書き下さい。
(　　)

14 あなたと現在同居しているご家族について例にならつて下の表にご記入下さい。

注意　1 続柄は夫からみた続柄をお書き下さい。
2 教育年数は参考分類を使ってお書き下さい。
3 職業は参考分類を使って記号でお書き下さい。

続　柄	年齢	教育年数	職　業				
例、夫	35	12	C－1				
例、妻	30	12	L				
例、長女	6	1	M				

※　職業参考分類

A 専門的・技術的職業　1 設計技師　2 技術者　3 学校教員　4 大学教員　5 医師　6 医療保健技術者　7 司法官　8 保母　9 新聞記者　10 著作家　11 美術家　12 その他

B 管理的職業　1 会社社長　2 会社役員　3 団体役員　4 駅長　5 局長　6 工場長　7 高級公務員　8 その他

C 事務　1 一般事務員　2 会計事務　3 タイピスト　4 出札係　5 速記者　6 一般公務員　7 作業的事務員　8 その他

D 販売　1 小売店主　2 卸売店主　3 販売員　4 店員　5 貿易商人　6 行商人　7 飲食店主　8 外交員　9 不動産仲介人　10 その他

E 農林業　1 農耕人　2 野菜栽培者　3 造園師　4 庭師　5 林作業者　6 小鳥飼育者　7 その他

F 漁業　1 漁夫　2 漁船船長　3 水産養殖人　4 その他

G 運輸通信　1 電車運転士　2 バス・トラック・タクシー運転士　3 航海士　4 航空士　5 電話交換手　6 荷作工　7 倉庫工　8 新聞配達人　9 その他

H 技能工・生産工　1 製鉄工　2 いもの工　3 旋盤工　4 電気器具組立工　5 電気器具修理工　6 自動車組立・修理工　7 紡績工　8 洋服仕立工　9 印刷工　10 飲食料品製造工　11 その他

I 保安職業　1 警察官　2 守衛　3 踏み切警手　4 消防士　5 自衛官　6 その他

J サービス業　1 理容師　2 美容師　3 家政婦　4 家庭教師　5 コック　6 旅館従業者　7 給仕人　8 アパート経営　9 その他

K採鉱採石作業　1 石切夫　2 じゃり採取人　3 その他

L 主婦

M 児童・生徒学生

N その他の職業

※　教育年数参考分類

6 年　小学校まで　　9 年　中学校まで　　12 年　高等学校まで（旧制中学を含む）

14 年　短期大学まで　　16 年　大学まで

以上でおわります。ご協力ありがとうございました。

教師用アンケート用紙

子どもの運動の好き、嫌いの表

	番号（出席番号順）	とても好む	好む	普通	好まない	まったく好まない
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						
8						
9						
10						
11						
12						
13						
14						
15						
16						
17						
18						
19						
20						
21						
22						
23						
24						
25						
26						
27						
28						
29						
30						
31						
32						
33						
34						
35						
36						
37						
38						
39						
40						
41						
42						
43						
44						
45						

順天堂大学体育学部健康管理学研究室編19827